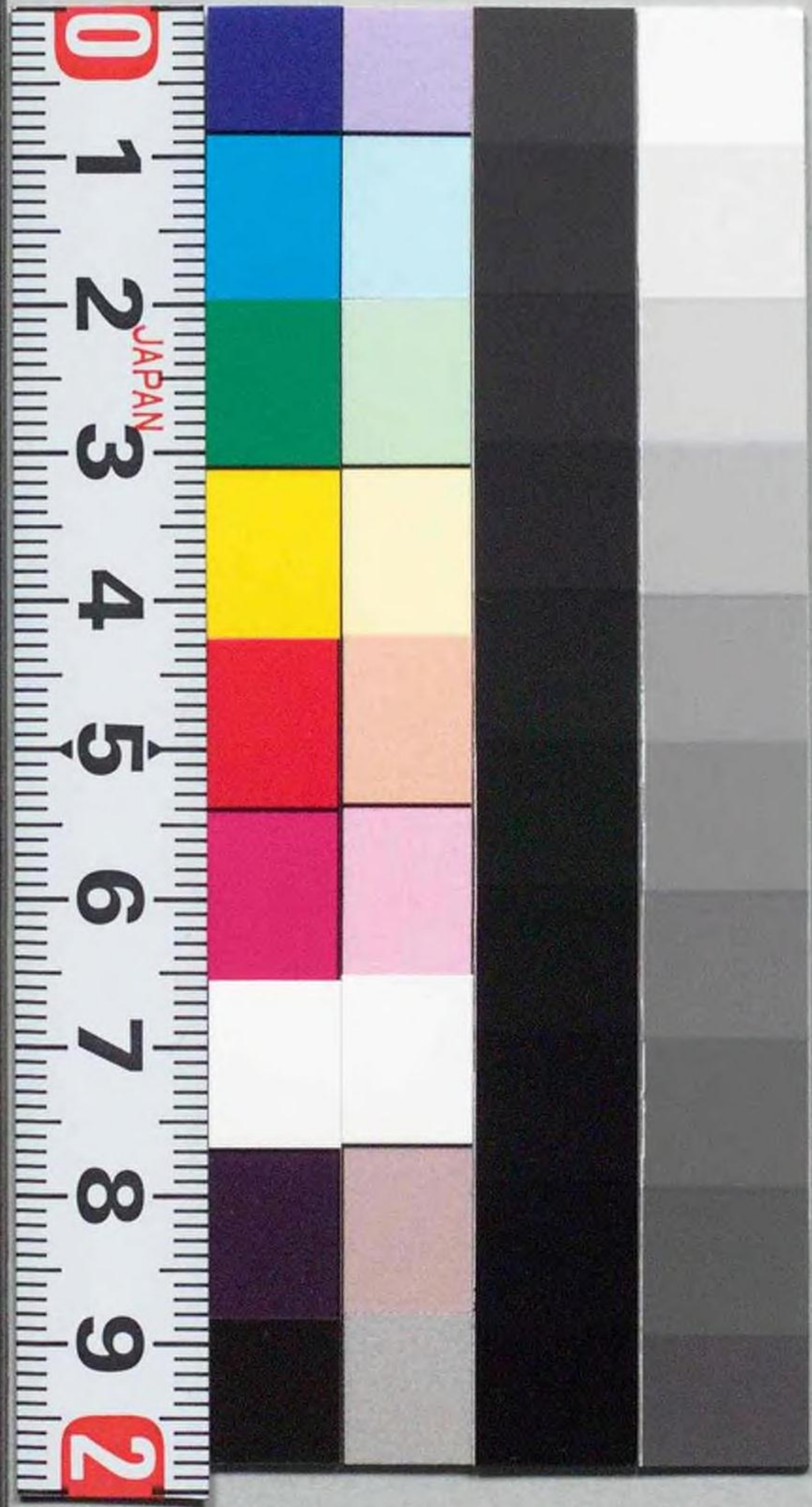


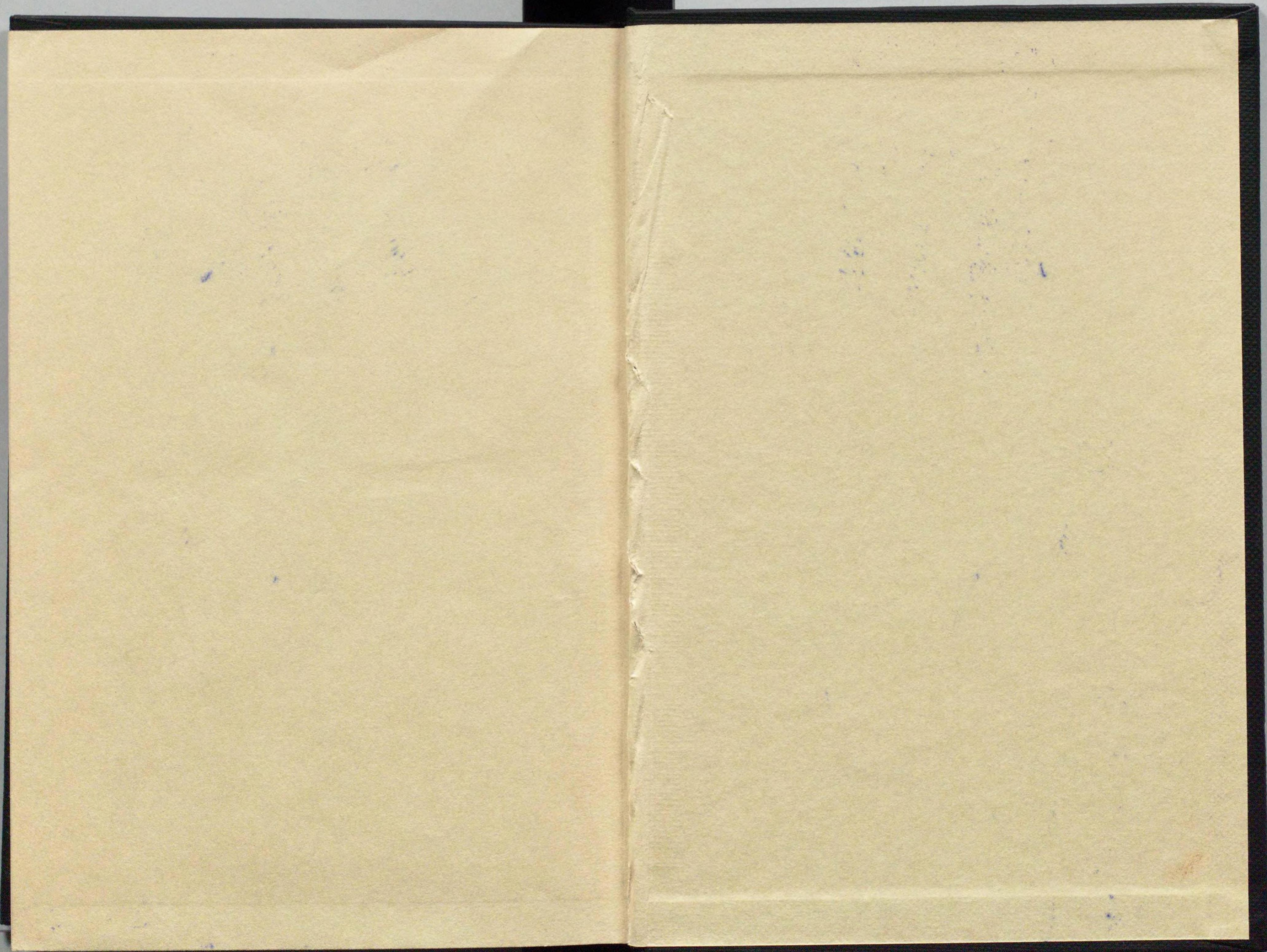
918.6  
0764o  
0(s)



00734083









折口信夫全集

第廿一卷

中央公論社

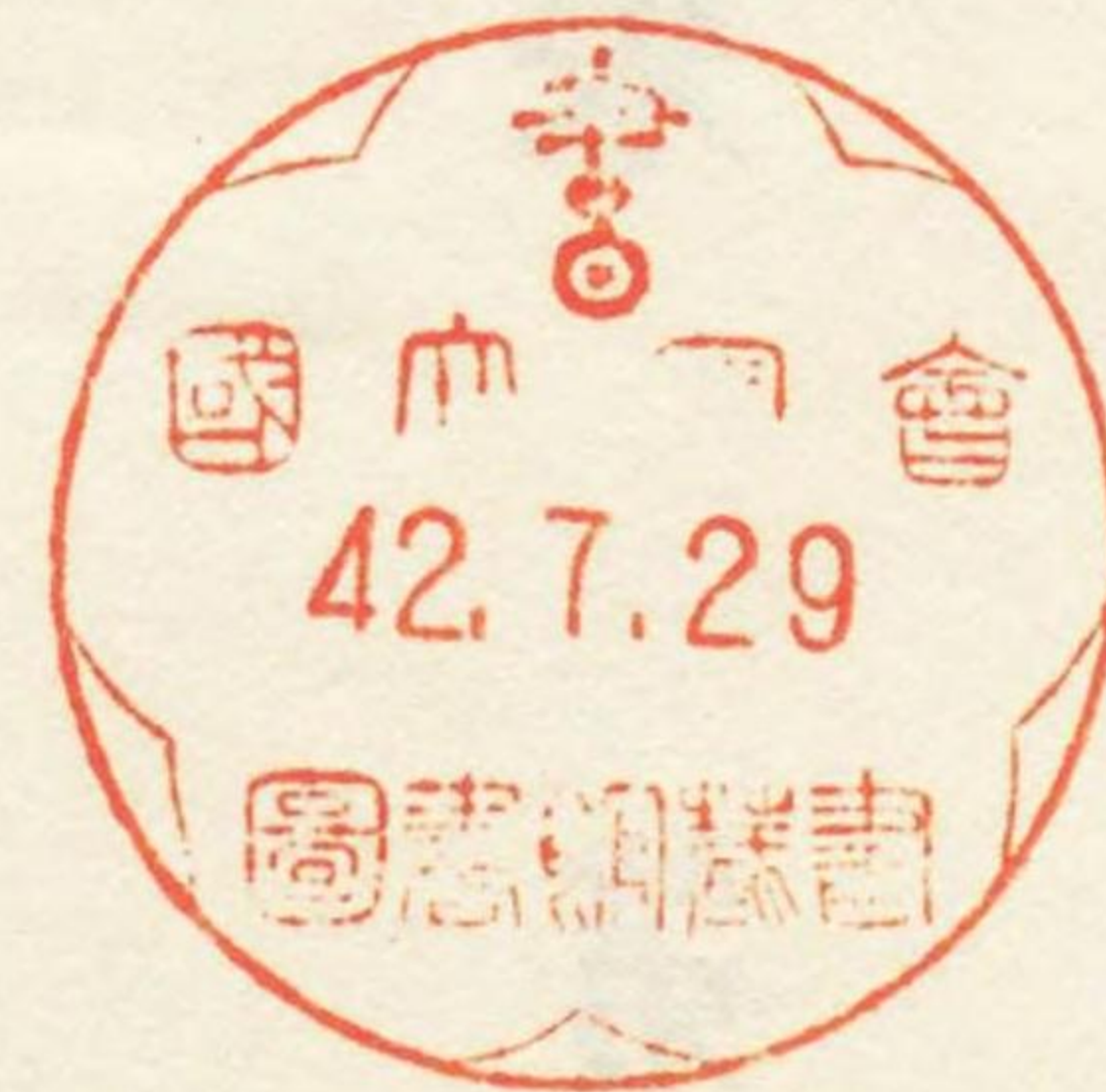


\*

918.6  
07640  
0(1A)



「水の上」出板の頃



734083



作品 1  
短歌



目次

海やまのあひだ ..... 一  
春のことぶれ ..... 一三  
水の上 ..... 三六  
遠やまひこ ..... 四七



海  
古  
水  
記



海やまのあひだ 目次

大正十四年

この集を、まづ與へむと思ふ子あるに (一首)……………二

大正十三年

島山 (十四首)……………	三
蟹の村 (十三首)……………	四
山 (三首)……………	六
氣多川 (十一首)……………	六
夜 (六首)……………	八
山住み (五首)……………	九



大正十二年

十二月二十七日 (二首)……………10  
 木地屋の家 (十五首)……………10  
 供養塔 (五首)……………13  
 谷中清水町 (二首)……………13  
 静物 (二首)……………14  
 風の日 (四首)……………14

大正十一年

遠州奥領家 (八首)……………16  
 輕塵 (十一首)……………17  
 雪のうへ (二十首)……………18  
 夏になりゆく頃 (二首)……………19  
 かの二三子に寄す (三首)……………19  
 土佐へ歸る人に (一首)……………21

大正十年

をとめの島 (十三首)……………23  
 夜 (十三首)……………25  
 午後 (一首)……………27  
 友よ (七首)……………27

大正九年

大阪 (九首)……………29  
 みぞれ (十五首)……………30  
 山うら (五首)……………32  
 母 (十八首)……………33

大正八年

霜夜 (七首)……………36  
 蒜の葉 (三十八首)……………37



めひ (五首).....	五二
郡上八幡 (七首).....	五三
始羅の山 (三十九首).....	五四
一周忌 (二首).....	五九
冬木原 (十一首).....	六〇
枯山 (四首).....	六一
正月、梧平に寄す (六首).....	六二
春隣 (一首).....	六三
朝山 (七首).....	六三

大正七年

金富町 (五首).....	六五
お花 (三首).....	六六
村の子 (二首).....	六六
雪 (五首).....	六七
堀の内 (一首).....	六七

端山 (九首).....	六八
大つごもり (五首).....	六九
除夜 (十九首).....	七〇
だうろく神まつり (七首).....	七二

大正六年

霜 (十一首).....	七四
山および海 (七首).....	七五
熊野 (四首).....	七六
濱名 (二首).....	七七
夾竹桃 (八首).....	七七
ある生徒 (一首).....	七八
左千夫翁五年忌 (七首).....	七九
夏相聞 (七首).....	八〇
鑽仰庵 (十八首).....	八一
朝の森暮の森 (六首).....	八三



野あるき (二十三首).....	八四
いろものせき (七首).....	八八
清志に興へたる (四首).....	八九
校正室 (二首).....	八九
新橋停車場 (五首).....	九〇

大正五年

火口原 (十一首).....	九一
森の二時間 (六首).....	九二
初七日 (六首).....	九三
いろは館 (二首).....	九四

大正四年以前、明治四十四年まで

おほとしの日 (五首).....	九五
左千夫翁三周忌 (四首).....	九六
蕪道 (七首).....	九六

錢 (四首).....	九七
三矢五郎氏を悼む (三首).....	九八
家びとの消息来て (一首).....	九八
我孫子 (五首).....	九九
大秦寺 (五首).....	九九
鹽原 (六首).....	一〇〇
生徒 (二十一首).....	一〇一
阿蘇を越えて (三首).....	一〇四
奥熊野 (二十三首).....	一〇五

明治四十三年以前、三十七年頃まで

焚きあまし 一 (二十三首).....	一〇六
おなじく 二 (五十二首).....	一一一
この集のすゑに.....	一一八



大正十四年 一首

この集を、まづ興へむと思ふ子あるに、

かの子らや われに知られぬ妻とりて、  
生きのひそけさに わびつゝをぬむ



大正十三年 一五十二首

島山

葛の花 踏みしだかれて、色あたらし。この山道を行きし人あり  
谷々に、家居ちりぼひ ひそけさよ。山の木の間に息づく。われは  
山岸に、晝を 地蟲チの鳴き満ちて、このしづけさに 身はつかれたり  
山の際マの空ひた曇る さびしさよ。四方の木コむらは 音たえにけり  
この島に、われを見知れる人はあらず。やすしと思ふあゆみの さびしさ

わがあとに 歩みゆるべずつゞき來る子にも言へば、恥ぢてこたへず  
ひとりある心ゆるびに、島山のさやけきに向きて、息つきにけり  
ゆき行きて、ひそけさあまる山路かな。ひとりごころは もの言ひにけり  
もの言はぬ日かさなれり。稀に言ふことばつたなく 足らふ心  
いきどほる心すべなし。手にすゑて、蟹のはさみを もぎはなちたり  
澤の道に、こゝだ逃げ散る蟹のむれ 踏みつぶしつゝ、心むなしもよ  
いまだ わが ものに寂しむさがやまず。沖の小島にひとり遊びて  
蟹の家 隣りすくなみあひむつみ、湯をたてにけり。荒磯アラのうへに



ゆくりなく訪ひしわれゆゑ、山の家の雛の親鳥は、くびられにけむ

雛の子の ひろき屋庭に出でゐるが、夕焼けどきを過ぎて さびしも

蟹の村

網曳<sup>アビ</sup>きする村を見おろす阪のうへ にぎはしくして、さびしくありけり

磯村へますぐにさがる 山みちに、心ひもじく 波の色を見つ

すこやかに網曳<sup>アビ</sup>きはたらく蟹の子に、言はむことばもなきが さぶしさ

蟹をのこ あびき張る脚すね長に、あかき禪<sup>ハム</sup>高く、ゆひ固めたり

あわびとる蟹のをとこの赤きへこ 目にしむ色か。浪がくれつ、

蟹の子のかづき苦しみ 吐ける息を、旅にし聞けば、かそけくありけり

行きずりの旅と、われ思ふ。蟹びとの素肌のほひ まさびしくあり

赤ふどしのまあたらしさよ。わかければ、この蟹の子も、ものを思へり

蟹の子や あかきそびらの盛り肉<sup>ジシ</sup>の、もり膨れつゝ、舟漕ぎにけり

あぢきなく 旅やつゞけむ。蟹が子の心生きつゝはたらく 見れば

蟹をのこのふるまひ見れば さびしさよ。脛<sup>ハキ</sup>長々と 砂のうへに居り

船べりに浮きて息づく 蟹が子の青き瞳は、われを見にけり

蟹の子のむれにまじりて経なむと思ふ はかなごゝろを 叱り居にけり



若松のみどりいきるゝ山はらに、わが足おとの いともかそけさ

目のかぎり 若松山の日のさかり 遠峰トホミネの間の空のまアさ青アさ

田向ひに、黒檜ヒたち繁シむ山の崎 ゆたになだれて、雨あるに似たり

氣多川

きはまりて ものさびしき時すぎて、麥うらしひとつ 鳴き出でにけり

麥うらしの聲 ひさしくなきつげり。ひとつところの、をぐらくなれり

むぎうらし ひとつ鳴き居し聲たえて、ふたゝびは鳴かず。山の寂けさ

ふるき人 みなから我をそむきけむ 身のさびしさよ。むぎうらし鳴く

麥うらしは、早蟬。鳴いて、麥にみを入れる、と言ふ考へからの名。



山中ナカに今日はあひたる 唯ひとりの をみな やつれて居たりけるかも

にぎはしく 人住みにけり。はるかなる木むらの中ゆ 人わらふ聲

これの世は、さびしきかもよ。奥山も、ひとり人住む家は さねなし

氣多川ケタガハのさやけき見れば、をち方のかじかの聲は しづけかりけり

ひるがほの いまださびしきいろひかも。朝の間と思ふ日は 照りみてり



あさ茅原<sup>チハラ</sup> つばな輝く日の光り まほにし見れば、風そよぎけり  
家裏に 鳴きつゝうつる鶏の聲。茅の家壁<sup>ヤ</sup>を風とほり吹く

夜

啼き倦みて 聲やめぬらし。鴉の止<sup>ト</sup>へる木は、おぼろになれり  
山の霧いや明りつゝ、鴉の 唯ひと聲は、大きかりけり  
鴉棲<sup>キ</sup>る梢 わかれずなりにけり。山の夜霧はあかるけれども  
さ夜ふけと 風はおだやむ。麓べの澤のかや原そよぎつゝ聞ゆ

山中<sup>ナカ</sup>は 月のおも昏<sup>クラ</sup>くなりなりにけり。四方のいきもの 絶えにけらしも

山深きあかとき闇や。火をすりて、片時見えしわが立ち處<sup>ド</sup>かも

山住み

夕かげの明りにうかぶ土の色。ほのかに 靄は這ひにけるかも  
ほのくゝと 道はをぐらし。土ぼこり踏みしづめつゝ われは來にけり  
青々と 山の梢のまだ昏れず。遠きこだまは、岩たゝくらし  
はたごの土間に 餌をかふつばくらめの 聲ひそけさや。人おとはせず  
をとめ一人 まびろき土間に立つならし。くらきその聲 宿せむと言ふ



大正十二年 一三十首

十二月二十七日

あまつ日の み冬來向ふ色さびし。わが大君は ものを思へり

霜月の 日よりなごみの あまりにも寂けき空の したおぼゝしも

木地屋の家

うちわたす 大茅原となりにけり。茅の葉光る暑き風かも

鳥の聲 遙かなるかも。山腹フの午後の日ざしは、旅を倦ましむ

高く來て、音なき霧のうごき見つ。木むらにひゞく われのしはぶき

篤ス深き山澤遠き見おろしに、轆轤音して、家ちひさくあり

澤なかの木キ地ヂ屋ヤの家にゆくわれの ひそけき歩みは 誰知らめやも

山々をわたりて、人は老いにけり。山のさびしさを われに聞かせつ

夏やけの苗木の杉の、あか／＼と つゞく峰ツの上ゆ わがくだり來つ

山びとは、轆轤ひきつゝあやしまず。わがつく息の 大きと息を

誰びとに われ憚りて、もの言はむ。かそけき家に、山びとゝをり

澤蟹をもてあそぶ子に、錢くれて、赤きたなそこを 我は見にけり



わらはべのひとり遊びや。日の昏るゝ澤のたぎちに、うつゝなくあり  
友なしに あそべる子かも。うち對ふ 山も 父母も、みなもだしたり

戻るとき、よびとめて手にくれたのは、木ぼつこであつた。木  
地屋でなくてはつくりさうもない、如何にもてづいな、親しみ  
のある、童子といふ名のふさはしい人形である。

木ぼつこの目鼻を見れば、けうとさよ。すべなき時に、わが笑ひたり

山道に しばくたゝずむ。目にとめて見らく さびしき木ぼつこの顔



山峽の激ちの波のほの明り われを呼ぶ人の聲を聞けり

供養塔

數多い馬塚の中に、ま新しい馬頭觀音の石塔婆の立つてゐる  
のは、あはれである。又殆、峠毎に、旅死にの墓がある。中  
には、業病の姿を家から隠して、死ぬるまでの旅に出た人の  
などもある。

人も 馬も 道ゆきつかれ死にゝけり。旅寝かさなるほどの かそけさ

道に死ぬる馬は、佛となりにけり。行きとゞまらむ旅ならなくに

邑山ムラの松の木むらに、日はあたり ひそけきかもよ。旅びとの墓

ひそかなる心をもりて をはりけむ。命のきはに、言ふこともなく

ゆきつきて 道にたふるゝ生き物のかそけき墓は、草つゝみたり



家ごとを處女にあづけ、年深く二階に居れば、もの音もなし

水桶につけたるまゝの菊のたば 夜ふかく見れば、水あげにけり

静物

紫陽花の まだとゝのはぬうてなに、花の紫の、色立ちにけり

あぢさゐの蕾ほぐれず 粒だちて、うてなの上に みち充ちにけり

風の日

さるとりの若き芽生<sup>メ</sup>ひの、ひたぶるに なよめくものを 刺<sup>く</sup>たち<sup>ち</sup>にけり

さるとりの鬚しなやかに濡れにけり。露はつばらに、こまやかにして

うす緑 まだやはらかに、つゞらの葉。つやめく赤<sup>アキ</sup>に筋とほりたり

たえまなく 梢<sup>ツツ</sup>すく風に日かけ洩り、はげしきものか。下草のかをり



大正十一年 一四十五首

遠州奥領家

山ぐちの櫻昏れつゝ、ほの白き道の空には、鳴く鳥も棲<sup>+</sup>ず

燈<sup>ヒ</sup>ともさぬ村を行きたり。山かげの道のあかりは、月あるらしも

道なかは もの音もなし。湯を立つる柴木のけぶり にほひ充ちつゝ

山深く こもりて響く風のおと。夜の久しさを堪へなむと思ふ

山のうへに、かそけく人は住みにけり。道くだり來る心はなごめり

ほがらなる心の人にあひにけり。うや／＼しさの 息をつきたり

山なかに、悸<sup>イキドホ</sup>りつゝ、はかなさよ。遂げむ世知らず ひとりをもれば

山深く われは來にけり。山深き木々のとよみは、音やみにけり

輕塵

人ごとのあわたゞしさよ。閩<sup>チマダ</sup>より立ちうつり行く ほこりさびしも

庭土に、櫻の葎のはらゝなり。日なか さびしきあらしのとよみ

もの言ひの いきどほろしき隣びとの家うごくもよ。あらしに見れば

春のあらし 静まる町の足<sup>ア</sup>の音を 心したしく聞きにけるかも



春の夜の町音聽けば、人ごとに　むつまじげなるもの言ひにけり  
心ひく言をきかずなりにけり。うとくしきは、すべなきものを  
ひとりのみ憤りけり。ほがらかに、あへばすなはち　もの言ふ人  
人の言ふことばを聞けば、山川のおもかげたち來ること　多くなれり  
人來れば　さびしかりけり。かならず　我をたばかるもの言ひにけり  
ほがらに　心たまたむ。人みな　はかなきことを言ひに來にけり  
かたくなにまもるひとりを　堪へさせよ。さびしき心　遂げむと思ふに

雪のうへ

雨のうちに、雪ふりにけり。雪のうへに　杳あとする我は　ひとりを  
十年あまり七とせを経つ。たもち難くなり來る心の　さびしくありけり  
新しき年のはじめの春駒の　をどりさびしもよ。年さかりたり  
道なかに、明りさしたる家稀に、起きてもの言ふ聲の　静けさ  
町中<sup>ナカ</sup>に、鶏鳴きにけり。空際<sup>キバ</sup>のあかりまされるは、夜深かるらし  
犬の子の鳴き寄る聲の　死にやすき生きのをに思ふ戀ひは、さびしも  
遂げがたき心なりけり。ありさりて、空しとぞ思ふ。雪のうへは解け  
軒<sup>ノ</sup>ごもりに　秋<sup>アキ</sup>の地蟲<sup>チムシ</sup>の聲ならで、つたはり來るは、人<sup>ヒト</sup>軒<sup>ノ</sup>くらし



うるはしき子の 遊びとよもす家のうちに、心やすけき人となりぬらむ

直面ヒタオモテに たゞひ満ちたる暗き水。思ひ堪へなむ。ひとりなる心に

水の面オモの暗きうねりの上あかり はるけき人は、我を死なしめむ

水のおもの深きうねりの ゆくりなく目を過ぎぬらし。遠びとのかけ

闇夜の 雲のうごきの静かなる 水のおもてを堪へて見にけり

みぎはに、芥焼く人居たりけり。静けき夜らを 戀ひにけるかも

川みづの夜はの明りに うかびたる木群コムラのうれは、揺れ居るらしも

くら闇に そよぎ親しきものゝ音。水蘆むらは、そがひなりけり

遠ぞく夜風の音や。いやさかる思ひすべなく 雨こぼるめり

父母の庭の訓へにそむかねば、心まさびしき二十年を経つ

川波の白くゞだくる橋柱の あらはれ來つゝ 人は還らめや

あかり來る橋場の水に、あかときのあわ雪ふりて、消えにけるかも

夏になりゆく頃

春山の青葉たけつゝつやめける 日となりながら、晝のさびしさ

はやち吹く 竝み木の木原コハラ。なきみてる蟬よりほかの聲 たゞずけり

かの二三子に寄す



この日ごろ ことばけはしくなりたりけり。さびしき心 人を叱るも  
若き人の怠りくらす心はさびし。いましめ易きことにあらず

うつそみの人はさびしも。すさのをぞ 怒りつゝ 國は成しけるものを

土佐へ歸る人に

洋なかに おだやむ風や。目をあきて、親のいまはの息の音 きけり

大正十年 一三十四首

をとめの島

一琉球一

朝やけのあかりしづまり、ほの暗し。夏ぐれけぶる 島の藪原

「なつぐれ」は、ゆふだちの方言。

落づるのすがるゝ砂は けぶりたち、洋の朝風 島を吹き越ゆ

洋なかの島に越え來て ひそかなり。この島人は、知らずやあらむ

地べたから十歩二十歩、深いのになると、四五十歩もおりねば  
ならぬ水波み場さへ、稀ではない。降り井・穴井など、方言で  
は言ふ。



をとめ居て、ことばあらずふ聲すなり。穴井アナヰの底のくらし水影ミヅカゲ

處女のかぐろき髪を あはれと思ふ。穴井の底ゆ、水汲みのぼる

島の井に 水を戴くをとめのころも。その襟細き胸は濡れたり

鳴く鳥の聲 いちじるくかはりたり。沖繩じまに、我は居りと思ふ

あまたゐる山羊みな鳴きて 喧カマレズしきが、ひた寂しもよ。島人の宿に

島をみな、戻りしあとの静けさや。縁の明りに、しりのかたつけり

かべ茅ゆ洩れゆく煙 ひとりなる心をたもつ。ゆふべ久しく

壁は、茅の葺きおろしである。内地の古語のまゝ、えつりと言うてゐる。

目ざめつゝ聽けば、さびしも。壁茅のさやぎは、いまだ夜ぶかくありけり

人の住むところは見えず。荒濱に向きてすわれり。刳クり舟二つ

絲滿イトマンの家ヤむらに來れば、人はなし。家五つありて、山羊一つなけり

絲滿。絲滿人を、方言風の言ひ方で、かう言ふ。絲滿の町から、一軒二軒五六軒、出れふに來る。寂しい磯ばた・島かげなどに小屋がけして、時を定めて、來ては歸る。一年中の大方は、そこで暮してゐる。

夜

下伊那の奥、矢矧川の峽野カクナに、海と言ふ在所がある。家三軒、皆、鼻道に向いて居る。中に、一人の翁がある。何時頃からか狂ひ出して、夜でも晝でも、河原に出てゐる。色々の形の石を拾りて來ては、此小名の兩境ナナに竝べて置く。其一つひとつに、知つた限りの聖衆の姿を、觀じて居るのだと聞いた。どれを何佛・何大士と思ひ辨ワつことの出來るのは、其翁ばかりである。



ながき夜の　ねむりの後も、なほ夜なる　月おし照れり。河原菅原

川原の樗アツチの隈の繁シみくくに、夜ごゑの鳥は、い寝あぐむらし

川原田に住みつゝ曇る月の色　稻の花香ガの、よどみたるかも

かの見ゆる丘根ヲキの篤原　ひたくだりに、さ夜風おだやむ　月夜のひゞき

をちかたに、水霧ミナギラひ照る湍セのあかり　龍女リウニョのかげ　群れつゝをどる

光る湍の　其處につどはす三世ミヨの佛ホトケ　まじらひがたき、現身ウツソミ。われは

ひたぶるに月夜ツクヨおし照る河原かも。立たすは　薬師。坐カるは　釋迦モニ文尼

湍を過ぎて、淵ウツナミによどめる波のおも。かそけき音も　なくなりけり

時ありて　渦波ウツナミおこる淵のおも。何おともなき　そのめぐりはも

うづ波のもなか　穿ウツけたり。見るくに　青蓮華シヤウレンケのはな　咲き出づらし

水底ミナソコに、うつそみの面わ　沈透シツツき見ゆ。來む世も、我の　寂しくあらむ

川霧にもろ枝翳サしたる合歡キムのうれ　生きてうごめく　ものあるらしも

合歡の葉の深きねむりは見えねども、うつそみ愛アしき　その香たち來も

午後

霜凍イての、ぬくもり解くる西おもては、夕かげすでに　もよほしにけり

〔飯田町國學院の庭〕

友よ



目ふたぎて いまだは睡ねど、しづごゝろ 怒りに堪ふる思ひになり來

たはやすく 人の言をまことあるものとし憑む。さびしき我がさが

鐵瓶の 鳴り細りゆくゝら闇の 燠火のいろに、念ひ凝すも

面むかへば、たゞちに信じ、ひたぶるに心をゆるす すべなきわがさが

とまりゆく音のまどほさ。目に見えぬ時計のおもてに、ひた向ひ居り

いきどほる心おちつく すべなさや。門弟子ひとり 今宵とめたり

もろともに 若きうれひはとひしかど、人の悔しき年にはなりつ

大正九年 一四十七首

大阪

風吹きて 岸に飄蕩ぐ舟のうちに、魚を焼かせて 待ちてわが居り

川風にきしめく舟にあがる波。きえて 復來る小き鳥 ひとつ

はやりかぜに、死ぬる人多き町に歸り、家をる日かず 久しくなりぬ

ふるさとの町を いとふと思はねば、人に知られぬ思ひの かそけさ

ふるさとはさびしかりけり。いさかへる子らの言も、我に似にけり



をりくくに しいづる我のあやまちを、笑ふことなる 家はさびしも  
久しくはとまらぬ家に、つしましく 人ことわりて、こもる日つゞく  
兄の子の遊ぶを見れば、圓くゐて 阿波のおつるの話せりけり

いわけなき我を見知りし町びとの、今はおほよそは、亡くなりけり

みぞれ

よろこびて さびしくなれり。庭松に 雲のそゞり時うつりつゝ

國さかり この二十年を見ざりけり。目を見あひつゝあるは すべなし  
をぢなきわらはべにて 我がありしかば、我を愛し<sup>カナ</sup>と言ひし人はも

つゞくくに かたらひ居りて飽かなくに、年深き町のとゞろき聞ゆ

若き時 旅路にありしことおほく 忘れずありけり。われも わが友も

過ぎにし年をかたらへば、はかなさよ。牀の黄菊の 現<sup>ウツ</sup>しくもあらず

酒たしむ人になりたる友の顔 いまだわかみと 言に出でゝほめつ

宵あさく 雲あがりし闇のそら なほ雪あると 言ひにけるかも

あはずありし時の思ひあり。夜の街 小路<sup>コウヂ</sup>のあかり、大路にとゞく

雨のゝち あかりとほしきぬかり道に、心たゆみのしるきをおほゆ

星満ちて 霜氣<sup>ガ</sup>霽れたる空潤し。値ひがたき世に あふこともあらむ



行きとほる 家竝みのほかげ明ければ、人いりこぞる家 多く見ゆ  
夜の町に、室の花うるわらはべの その手かじけて、花たばね居り  
道なかに 花賣れりけり。別れ來し心つゝしみに 花もとめたり  
過ぐる日は、はるけきかもと 言ひしかど、人はすなはち はるけくなりつ

山うら

御柱海道 凍て、眞直なり。かじけつゝ、鶏はかたまりて居る  
うちわたす 大泉 小泉 山なほ見え、刈り田の面は、昏くなりたり

その山かげには、赤彦さんの生家がある。

八个嶺の 其の山竝みに、蓼科の山の腹黄なり。霧霽れ來れば  
八个嶽の山うらに吸ふ朝の汁。さびしみにけり。魚のかをりを  
諏訪びとは、建御名方の後といへど、心穩ひの あしくもあらず

母

この心 悔ゆとか言はも。ひとりの おやをかそけく 死なせたるかも  
かみそりの鏡刃の動きに おどろけど、目つぶりがたし。母を剃りつゝ  
あわたゞしく 母がむくろをはふり去る心ともなし。夜はの霜ふみ  
見おろせば、濃涌きにこるさかひ川 この里いでぬ母が世なりし



まれ／＼は、土におちつくあわ雪の 消えつゝ、庭のまねく濡れたり

昔つかぬ庭のすゑ石 面かわき、雨あがりつゝ、晝の久しさ

古庭と荒れゆくつぼも ほがらかに、晝のみ空ゆ 煙さがるも

町なかの煤ふる庭は、ふきの蓋たちよごれつゝ、土からび居り

庭の木の立ち枯れ見れば、白じろと 幹にあまりて、蟲むれとべり

二七日 フタナナカ 近づきにけり。家深く 藏に出で入る土戸のひびき

家ふえてまれにのみ來る鶯の、かれ 鳴き居りと、兄の言ひつゝ、

静けさは 常としもなし。店とほく、とほりて響く ぜに函の音

さびしさに馴れつゝ住めば、兄の子のとよもす家を 旅とし思ふ

はらからのかくむ火桶に唇かわき、言にコトあまれる心はたらへり

顔多みて その言しふる弟の こゝろしたしみは、我よく知れり

たま／＼は 出でつゝ間ある兄の留守。待つにしもあらず 親しみて居り

若げなるおもわは、今は とゝのほり、叔母のみことの 母さびいます

遠くより 歸りあつまるはらからに、事をへむ日かず いくらも残らず



霜夜

竹山に 古葉おちつくおと聞ゆ。霜夜のふけに、覺めつゝ居れば  
わがせどに 立ち繁む竹の梢冷ゆる 天の霜夜と 目を瞑りをり  
とまり行く音と聞きつゝ、さ夜ふかき時計のおもてを 寝て仰ぎ居り  
枕べのくりやの障子 あかりたり。疊をうちて、鼠をしかる  
ひき牕のがらすにあたる風のおと 霜の白みは、夜あけかと思ふ

くりや戸のがらすにうつる こそすの夜目のそよぎは、明け近からし  
息ざしの 土に觸りたる外のけはひ 誰かい寝らし。わが軒のうちに

蒜の葉

叱ることありて後

薩摩より、汝がふみ來到る。ふみの上に、涙おとして喜ぶ。われは

蒜の葉

雪間にかゝふ蒜の葉 若ければ、我にそむきて行く心はも  
おのづから 歩みとどまる。雪のうへに なげく心を、汝は 知らざらむ



朝風に、粉雪けぶれるひとたひら。會津の櫻 固くふゝめり

雪のこる會津の澤に、赤きもの 根延ふ野櫨は、かたまり咲けり

踏みわたる山高原の斑れ雪。心さびしも。ひとりし行けり

會津嶺に ぶりさけゝぶる雪おろしを 見つゝ呆れたる心とつげむ

榛の木の若芽つやめく晝の道。ほとく 心くづほれ來る

屋の上は、霜ふかゝらむ。會津の山 思ひたへ居り。夜はの湯槽に

鹿兒島

島山のうへに ひろがる笠雲あり。日の後の空は、底あかりして

ゑまひのにほひ なほいわけなき子を見まく 筑紫には來つ。心たゆむな

憎みつゝ來し汝がうなじに 骨いでゝ 瘦せたる後姿見むと思へや

うなだれて、汝はあゆめり 渚の道。憎しと思ふ心にあらず

憎みがたき心はさびし。島山の緑かげろふ時を經につゝ

汝が心そむけるを知る。山路ゆき いきどほろしくして、もの言ひがたし

叱りつゝ、もの言ふ夜はの牀のうちに、こたへせぬ子を あやぶみにけり

庭草に、やみてはふりつづつゆの雨 心怒りのたゆみ來にけり

わが黙す心を知れり。燈のしたに ひたうつむきて、身じろかぬ汝は



虔<sup>ツ</sup>ましきしゝまに 對<sup>ムカ</sup>ふ汝がうなじに、一つゐる蚊を、わが知りて居り  
ころび聲 まさしきものか。わが聲なり。怒らじとする心は おどろく  
燈のしたに、怖<sup>オ</sup>ぢかしくまる汝が肩を 瘦せたりと思ひ、心さびしも  
からくして 面<sup>オモテ</sup>を起す 汝の頬 白くかわきて 胸はかりがたし  
一言を言ひ疏<sup>ト</sup>くとせぬ汝の顔 まさに瞻<sup>モ</sup>りつゝ、あやぶみにけり  
言に出で、言はゞゆゝしみ、搏<sup>イクドホ</sup>動る胸を堪へつゝ、常の言いへり  
待ちがたく 心はさだまる。庭冷えて 露くだる夜となりにけるかも  
さ夜深く 風吹き起れり。待ち明す 心ともあらず。大路のうへに

額<sup>ズカ</sup>のうへに くらくそよげる城山の 梢を見れば、夜はもなかなり  
篠垣の夜深きそよぎ 道側<sup>ツラ</sup>に、立ちまどろめる心倦みつゝ、  
はるけき 辻ゆ來向ふ車の燈。音なきはしりを瞻<sup>モ</sup>る夜はふけぬ  
をちこちの家に、ま遠に うつ時計。大路の夜の くだつを知れり  
夜なかまで 家には來ずて、わが目避<sup>ヨ</sup>く汝があるきを 思ひ苦しも

寄物陳思

尾張<sup>ヲウグヒ</sup>少昨<sup>シヤク</sup>のぼらず。年満ちて、きのふも 今日も、人續<sup>ツ</sup>ぎて上る  
つくしの遊行<sup>ウカレヲトメ</sup>嬢子になづみつゝ、旅人<sup>タヒト</sup>は 竟<sup>ツヒ</sup>に還りたりけり



よき司 われは持たらぬ憶良ゆゑ、汝がゐやまひは、受け得ずなりたり

かの少昨の爲に

國遠く、我におぢつゝ、汝が住みてありと思ふ時 悔いにけるかも

何ごとも、完スデにをはりぬ。息づきて 全くマダ霽ハルけむ心ともがな

寛ユルシ恕なき我ならめや。汝を瞻るに、心ほと／＼息づくころぞ

庭の木の古葉掃きつゝ、待ちごゝろ失せにし今を 安しと思はむ

めひ

私の姉なるその母と、十一二の頃から、私の生家に来てゐた女姪福井富美子は、去年女學校もすまして、今年十九になつてゐたのであつた。

わが家のひとり處女の、常ツネモダ黙すさびしきさがを 叱りけり。わが

をとめはも。肩の太りのおもりに、情ヨづかず見えし その後姿ウシロはも

われの家にとめとなりて、糾アザね髪 たけなるものを 死なせつるかも

茨マムダ田野の水涌き濁る塚原を、處女の家と 思ひ堪へめや

あきらめてをり と告げ來る 汝が母のすくなきことばは、人を哭かしむ

郡上八幡

八月末、長柄川の川上、郡上ノヂヤウの町に入る。この十二日の晝火事で、目抜きメヌキの街々、家千二百軒が焼けてゐた。

焼け原の町のもなかを行く水の せゝらぎ澄みて、秋近づけり



ゆくりなき旅のひと日に、見てあるけり。家亡びたる 山の町どころ

町びとは、いまだ愕くことやまず 家建ていそげり。焼け原の土に

焼け原の町の庭木は、幹焦げて 立ちさびしもよ。山風吹くに

夕されば、丘根吹きくだる山風の 青葉散りわたる。焼け土の原

青山の山ふところにほこり立ち、夕日かすめり。焼け原のうへ

山の際にほこりたなびき うらがなし。夕日あらはに、町どころ見ゆ

始羅の山

もの言ひて さびしさ残れり。大野らに、行きあひし人 遙けくなりたり

はろくに 埃をあぐる晝の道。ひとり目つぶる。草むらに向きて

夏やまの朝のいきれに、たどくし。人の命を愛しまずあらめや

遂げがたく 心は思へど、夏山のいきれの道に、歎息しまさる

言たえて 久しくなりぬ。始羅の山 喘へつゝ越ゆと 知らずやあらむ

日の照りの おとろへそむる野の土の あつき乾きを 草鞋にふむも

火の峰の山ふところに 寝て居りと思ふころは おどろかめやも

木々とよむ雨のなかより 鳥の聲 けたましくして、やみにけるかも

兒湯の山 棚田の奥に、妹と 夫と 飯はむ家を 我は見にけり



つばらに さゝ波光る赤江灘。この峰のうへゆ 見窮めがたし

海風の吹き頻く丘の砂の窪。散りたまる葉は、すべて青き葉

木のもとの仰ぎに 疎き枝のうれ。朝間の空は、色かはり易し

朝日照る川のま上のひと在所。臺地の麥原 刈りいそぐ見ゆ

緑葉のかゞやく森を前に置きて、ひたすらとあるくひとりぞ。われは

焼き畑のくろの立ち木の 夕目には、寂しくゆらぐ。赤き緒の笠

兒湯の川 長橋わたる。川の面に、揺れつゝ光る さゞれ波かも

森深き朝の曇りを あゆみ來て、しるくし見つも。藤のさがりを

青空になびかふ雲の はろくし。ひとりあゆめる道に つまづく

山原の茅原に しをるゝ晝顔の花。見過しがたく 我ゆきつかる

裾野原 野の上に遠き人の行き いつまでも見えて、かげろふ日の面

諸縣の山にすぐなる柚の道。疑はなくに 日は夕づけり

山下に、屋庭まひろきひと構へ。道はおりたり。その夕庭に

山の子は、後姿さびしも。風呂たきて、手拭白く かづきたりけり

この家の人の ゆふげにまじりつゝ、もの言ひことなる我と思へり

旅ごゝろのおどろき易きを叱りつゝ、柴火のくづれ 立てなほし居り



日のうちを いきれ残り。茶臼原バルの夏うぐひすは、草ごもり鳴く  
こすもすの蕾かたきに、手觸りたり。旅をやめなむ 心を持ちて

谷風に 花のみだれのほのくし。青野の權 山の邊へに散る

焼けはらの石ふみわたるわがうへに、山の夕雲 ひくく垂れ來も

ゆふだちの雨みだれ來る茅原ゆ、むかつ丘かけて 道見えわたる

野のをちを つらなりとほる馬のあし つばらに動く。夕雲シタの下に

幹だちのおぼめく木々に、ゆふべの雨 さやぐを聞きて、とまりに急ぐ

麥かちて 人らいこへる庭なかの 榎ノのうれに、鳥あまた動く

庭の木に、ひまなくうごく鳥のあたま 見つゝ 遠ゆくこと忘れ居り

竝み木原、車井のあと をちこち見ゆ。國は古國。家居さだまらず

峰ヲの上の町 家竝みに人のうごき見ゆ。山高くして、雲行きはやし

道のうへにかぐるくそゝる高山の 山の端あかり 居る雲の見ゆ

窓のしたに、海道カイダウひろく見えわたり、さ夜の旋風ツムツに 土けぶり立つ

山岸の葛葉のさがり つらくに、仰ぎつゝ來し。この道のあひだ

一周忌

山茶サンシュユのふゝめるまゝの冬の枝 傾ける 土の霜はとけたり



山菜蕨の 春のさかりはまだ遠し。母います土を偲びて居らむ

冬木原

梢<sup>ウレ</sup>高き柵<sup>クヌギ</sup>が原に、朝日さし、仰げは 目につく。山藨<sup>モダ</sup>のから

森の木のほつ枝にのこる山藨<sup>モダ</sup>のから ひとり すべなき心を持ってり

黙<sup>モダ</sup>ゆく心たへがたし。下向きて その孔見ゆれ。山藨<sup>モダ</sup>のから

まだ暮れぬ檜<sup>ヒ</sup>原<sup>ハラ</sup>をゆるす風のおと、あゆみをとめて、ひとりと知れり

風の音は 暮れしに似たる檜<sup>ヒ</sup>原<sup>ハラ</sup>のなか。梢<sup>ウレ</sup>を見れば、まだあかりあり

枯れ茅の 見おろし遠きどてのもと 穴に吸はるゝ 水の音すも

かれ茅のなづさふ川の雪消の水 青みふかくして、上<sup>ウヘ</sup>にごりをり

朝來たり ふたゝびとほる雪のうへに、鳥の足がた みだれてありけり

檜<sup>ヒ</sup>原<sup>ハラ</sup>の うしろにさがる丘<sup>ツツ</sup>根<sup>ネ</sup>の側<sup>ツツ</sup>面<sup>ラ</sup>。斑<sup>ハダレ</sup>雪<sup>レ</sup>の色は、いまだもくれず

宵の間の沓<sup>サ</sup>えはゆるる夜のくだち 雨ふるらしも。雪道のうへに

きさらぎの朝間の照りに、霜けふる 茅枯れ原の臥しみだれはも

枯山

枯<sup>カラ</sup>山<sup>ヤマ</sup>の梢 さやく雪散りて、こがらし吹きたつ。山の窪みに

から山<sup>コ</sup>の木むらに向きて吐く息を ひとりさびしめり。深く入り來て



冬山の木原<sup>コハラ</sup>の霜の見わたしに、おのづからひらく。いきどほる胸  
霜とくる冬草の葉の濡れ色の 目に入りきたる。心なごみに

正月、梧平に寄す

よべいねし部屋にさめたる あかつきの目に揺れてゐる 牀の山纒<sup>ヤマカゲ</sup>  
さ夜深く醒めて驚く。こは早も 年變りぬる時計のひゞき  
子どもあまた育つる家に 子らい寝て、親は起き居り。春のいそぎに  
いとけなき太郎男<sup>ヲ</sup>の子の、肩はりて横座<sup>+</sup>に坐るを 笑み瞻<sup>マモ</sup>る親  
仲子<sup>ナカチコ</sup>と 末<sup>メ</sup>の女の子の赤ら頬に、つきをかしもよ。おしろいの色

三人子の母となりて、友の妻 つまさびゐるも。春立てる家に

春隣

草の株まじりて黒き冬畑の 畝はぬ土は、霜にふくれたり

朝山

おのづから まなこは開く。朝日さし 去年のまゝなる部屋のもなかに  
猿曳きを宿によび入れて、年の朝 のどかに瞻<sup>マモ</sup>る。猿のをどりを  
遠き代の安倍<sup>アベ</sup>の童子<sup>ドウジ</sup>のふるごとを 猿はをどれり。年のはじめに  
目の下の冬木の中の村の道 行く人はなし。鴉おりゐる



麥の原の上にひろがる青空を　こは　雁わたる。元日の朝

元日は　悠々暮れて、ふゆ草の原　まどかに沈む赤き日のおも

故つびと　山に葛掘り、む月たつ今朝を入るらむ。深き林に

大正七年　一五十六首

金富町

この家の針子は　いち日笑ひ居り。こがらしゆする障子のなかに

晝さめて　こたつに聞けば、まだやめず。弟子をたしなむる家刀自のこゑ

馴れつゝも　わびしくありけり。家刀自　喰はする飯を三年はみつゝ

はじめより　軋みゆすれしこの二階。風の夜ねむる静ごころかも

雇はれ来て、やがて死にゆく小むすめの命をも見し。これの二階に



お花

高梨の家のお花が死んだのは、ちぶすでだった。年は十三であつたと思ふ。

したに<sup>+</sup>坐て もの言ふすべを知りそめて、よき小をんなとなりにしものを  
朝々に 火を持ち來り、炭つげるをさなきそぶり 牀よりぞ見し  
よろこびて 消毒を受く。これのみが、わがすることぞ。うなぬ子のため

村の子

笹の葉を喰みつゝ、口に泡はけり。愛<sup>カキ</sup>しき馬や。馬になれる子や  
麥芽たつ丘べの村の土ぼこりに 子どもだく踏む。馬のまねして

雪

さ夜なかに 覺めておどろく。夜はの雪 ふりうづむとも 人は知らじな  
ひそやかに あゆみをとどむ。夜はの雪踏み行くわれと 人知らめやも  
鴉なくお濱離宮の松のうれ つらく／＼白き 雪のふりはも  
足柄の小峰<sup>コミネ</sup>の原に、晝の雪淡<sup>アサ</sup>らにふりて、雀出てゐる  
松むらに、吹雪けぶれる丘のうへ 閑院さまの藁の屋根 見ゆ

堀の内

藪そとの石橋に出て、道ひろし。夕さどめきて 人つゞき來る



端山

やどり木の、枯れて繁み立つ谷の櫛 梢見かけて、なぞへ急なり  
谷ごしに、黒く填る松山や、青嶺の斑雪 夕日かゞやく

級島の 柑子の山に残る雪。あかり身にしむ。春の 日の入り  
まさ青に ゆふべなだるゝ草の原。この峰のあかりきえはてにけり

日のゝちの 明り久しき岨道に、そよぎをぐらし。柑子の葉むら  
峰亘す崖路のはだれは、草かげの昏れての後ぞ、目に互え來る  
ひた落ちに、丘根はさがれり。夕深き眼のくんだり 雪の色見ゆ

峰の上には、さ夜風おこる木のとよみ。たばこ火あかり、人くんだり來も



奥山の櫛が原ゆ立つ鳥の 一羽のあとは、立つ鳥もなし

大つごもり

この霜にいで來ることか。大みそか 砂風かぶる。阪のかしらに  
乾鮭のさがり しみゝに暗き軒。錢よみわたし、大みそかなる

病む母も、明日は雑煮の座になほる 下ゑましさに、臥ておはすらむ  
この部屋に、日ねもすあたる日の光り 大つごもりを、とすれば まどろむ



屋向ひの岩崎の門に、大かど松たつるさわぎを見おろす。われは

除夜

ふろしきに 鱈の尾見えて来る女の、片手の菊は、雨に濡れたり



年の夜の雲吹きおろす風のおと。二たび出で行く。砂捲く町へ

年の夜の阪の、ぼりに 見るものは、心やすらふ大櫛のかけ

年の夜 あたひ乏しきもの買ひて、銀座の街をおされつゝ来る

戻り来て、あか／＼照れる電燈のもと。寝てゐる顔に、もの言ひにけり

第一高等學校の生徒来て、挨拶をしたり。年の夜ふかく

槐の實 まだ落ちずあることを知る。大歳の夜 月はふけにけるかも

髣髴顯つ。速吸の門の波の色。年の夜をすわる疊のうへに

年玉は もてあそび物めきて見ゆ。机に竝べ、すべながりつゝ

金太郎よ 起きねと 夜はによびたれば、湯にや行かすと ねむりつゝ聞けり

人こぞる湯ぶねの上のがすの燈を 年かはる時と 瞻りつゝ居り

湯のそとに、はなしつゝ洗ふ人の聲。げに 事多き年なりしかも

五錢が花を求めて 歸るなり。年の夜 霜のおりの盛りに



わが部屋に、時計の夜はの響きはも。大つごもりの湯より戻れば  
年の夜は 明くる近きに、水仙の立ちのすがたをつくろひぬるも  
年の夜を寝むと言ひつゝ、火をいけるこたつは、灰のしとりしるしも  
年の夜の明くる待ちつゝ、久しさよ。こもくゝ起きて、こたつを掘るも  
臥て後も しばし起きぬる 年の夜のしづまる街を、自動車來たる  
しづまれる街のはてより、風のおと 起ると思ひつゝ、うつゝなくなる

だうろく神まつり

乾風カラの 砂捲く道に日は洩れて、睦月ヤツカ八日の空 片ぐもる

磯近き冬田に群れて 鳥鳴けり。見つゝ、聞きつゝ、道ゆく。われは

道なかに、御幣オシベの齋串イゲシたちそゝり、この村深く 太鼓とゞろく

七ぐさの 今日イマは明くる日。里なかのわらべに問へば、道饗ミチアへに行く

もの忘れをして 我は居にけり。夫婦メウトガミ神も、目を見あひつゝ、笑み居たまへり

村の子は、女夫メヲのくなどの 肩擁カダきています心を よく知りにけり

供へ物 五厘が鹽を買ひにけり。こゝの道祖クナドをはやさむ。われも



霜

窓の外は、ありあけ月夜。おぼしき夜空をわたる 雁のつらあり  
おのづから 覺め來る夢か。汽車のなかに、夜ふかく知りぬ。美濃路に入るを  
陸橋の 伸しかぶされる停車場の 夜ふけ久しく、汽車とまり居り  
眉間に、いまはのなやみ顯ち來たる 母が命を死なせじとすも  
死にたまふ母の病ひに趨くと めやまひふかし。汽車のとよみに

汽車はしる 闇夜にしるき霜の照り。この冷けさに、人は死なじも  
汽車の燈は、片あかりをり。をぐらき顔うつれる窓に、夜深く對へり  
窓の外は 師走八日の朝の霜。この夜のねぶり 難かりしかも  
汽車に明けて、野山の霜の朝けぶり すがしき今朝を 母死なめやも  
病む母の心 ちろかになりぬらし。わが名を呼べり。幼名によび  
いわけなき母をいさむるみとり女の 訛り語りの 憑しくあり

山および海

速吸の門なかに、ひとつ逢ふものに くれなる丸の 鱸じるし見ゆ



道の邊の廣葉の蔓<sup>カヅラ</sup> けざやかに、日の入りの後の土<sup>ノチ</sup>あかりはも  
汽車の窓 こゝにし迫る小松山 峰<sup>ヲ</sup>の上の聳<sup>ソク</sup>りはるけくし見ゆ  
夕<sup>タ</sup>闌けて 山まさ青<sup>ヲ</sup>なり。肥後の奥 人吉の町に、燈の つらなめる  
温泉の上に、煙かゝれる柘<sup>ツミ</sup>の枝。空にみだるゝ 赤とんぼかも  
遠き道したにもちつゝ、はたごの部屋 あしたのどかに、飯<sup>イ</sup>くひをはる  
この町に たゞ一人のみ知る人の 彼も見たてぬ 船場<sup>フネバ</sup>を歩く

熊野

朝海の波のくづれに、あるく鴉。こゝの岸より行くわれあるを

鳥の鳴く朝山のぼり、わたつみのみなぎらふ光りに、頭をゆする  
朝の間の草原<sup>クサツ</sup>のいきれ。疲れゆく 我<sup>ワレ</sup>を誰知らむ。熊野の道に  
朝あつき村を來はなれ、道なかに、汗をふきつゝ ものゝさびしさ

濱名

晝あつき家にこもれば、濱風の まさごはあがる。竹の簣の子に  
夕かげの まほなるものか。をちかたに 洲崎の沙の、静まれる色

夾竹桃

さめくゝと 今朝は霧ふる夾竹桃。片枝の荒れに、花はあかるき



群花の垂り著けれど、まともには、色おとろへず。夾竹桃の花

わが庭に、夾竹桃はしなえたり。ほこりをあびて、町より戻る

夕かげの庭のおくかの 隈深く 片あかりして、夾竹桃はある

たま／＼に目屬りやすらふ。いぶせさは、夾竹桃の花にさだまり

古がめに一枝をりさし はれ／＼し。庭にも 内にも、夾竹桃の花

提燈のあかりの／＼ぼる闇の空 そこに さわめく 夾竹桃の花

片枝のすがれは、まほに あらはに見ゆ。日だまりに照る 夾竹桃のはな

ある生徒

十月十二日、もとの生徒の、自殺した噂を聞く。

血あえたる汝がむくろを、いぬじもの 道にすてつ、人そしりけり

左千夫翁五年忌

水むけの茶碗の湛へ 揺れしるし。備れる墓のぬしと なりませり

吹きとほる風のそよめき、線香は、ほむら立ち來も。卒都婆のまへに

包み紙の赤きが濡れて、塚のうへにくゆり久しも。線香のたば

さかりぬし松葉牡丹 へりにけり。み墓さやかになりにて 寂し

たゞひと言 ほめくれたりと思ふ翁がことば うや／＼しけれど、思ひ出でず。今は



おくれ来て 寺の廣間にとほる茂吉 あつさ暑さと 扇ならすも  
大川のさつきの水の濁り波。秀がしら光る。そのくづれ波

夏相聞

ま晝の照りきはまりに 白む日の、大地あかるく 月夜のごとし  
ま晝の照りみなぎらふ道なかに、ひそかに 會ひて、いきづき瞻る  
青ぞらは、暫時曇る。軒ふかくこもらふ人の 息のかそけさ  
はるけく わかれ來にけり。ま晝日の照りしむ街に、顯つおもかげ  
ま晝日のかどやく道に立つほこり 羅紗のざうりの、目にいちじるし

街のはて 一樹の立ちのうちけぶり、遠目ゆうかり 川あるらしも 「ゆうかり」木の名

目の下に おしなみ光る町の屋根。こゝに、ひとり わかれ來にけり

鑽仰庵

うつり來て 麥原廣原 たどなかに、夜もすがら 燭す庵なりけり  
豊多摩の麥原のなかに、さ夜深く覺めてしはぶく。ともし火のもと  
こよひ早 夜なか過ぐらし。東京の 空のあかりは薄れたりけり  
長き日の黙の久しさ 堪へ來つゝ、このさ夜なかに、一人もの言ふ  
十方の蟲 こぞり來る聲聞ゆ。野に、ひとつ燈を守るは くるしゑ



更けて戻る夜戸のたどりに 觸りつれば、いちじゆくチの乳は、ふくらみて居り

梅雨ふかく今はなりぬれ、暫時イサトメの照りのあかりを いみじがり居る

刈りしほの麥の穂あかり昏れぬれど、いよゝさやけく 蛙子カヘルコは鳴く

刈りしほの麥原のなかは 晝ヒトの如明り残りて 蛙鳴きゐる

二三人 汽車ちり來つる高聲の こゝにし響く。おし照る月夜

さ夜霽バれのさみだれ空の底あかり。沼田ヌマタの澁シに、螢はすだく

曉アケ近き澁田シラナの畦ヅラの 列竝みに 螢はちきて、火をともしをり

さみだれの夜ふけて敲く 誰ならむ。まらうどならば、明日來りたまへ

さ夜風のとよみのなかに、窓の火の消えで残れる たふとくありけり

鼠子の一夜のあれに 寝そびれて、曉はやく起きて、飯イヒたく

めうくと あな うまくさき湯氣ふきて、朝餉アサゲ白飯シライヒ 熟ウみにけるかも

くりやべのしづけき夜らのさびしもよ。よべの鼠の こよひはあれず

ゆふあへの胡瓜もみ瓜 醋スにひで、まだしき味を 喜びまほる

朝の森暮の森

耳もとの鳥の羽ぶきに、森深き朝の歩みを とどめたりけり

むしあつき昨夜ヨひと夜さに 生れいで、朝森とよめ 初蟬はなく



朝森の砂地に 長くうごまれるモゲラ鼯鼠の道は、土新らしも

かの森の雑木のうら葉 さわだちに、照りみだりつゝ、風つのり行く

夕やけの空のあかりに ほのぐらく 枝はゆれゐる 向つ峰ラの松

森の葉のをぐらきそよぎ あまた夜を こゝには聞きつ。家さかりをり

野あるき

白じろと 經木眞田を編みためて、うつゝなきかも。草の上ツベのをとめ

道なかの庚申塚に穂麥さし、わが來て去ると、誰知るらめや

草の藪深く入り立ち、火をもやす男もだせり。さびしともなく

桑

桑の畑 若枝のもろ葉うちゆすり、とほり照りつゝ、光りしづけし

さ芽だちのみどりのいろひ にほはしき桑の若枝は 塵かうむれり

うちわたす窪田のなだれ ひとゝころ。桑の若枝の、日にかゞやけり

吹きとよむ桑の中路の向ひ風 眩マキラはしもよ。若葉の光り

荒蕪

草のなか 光りさだまるきんぼうげ。いちじるしもな。花 群れゆらく

きんぼうげ さわだつ花はほのかなれど、たゞこゝもとに、ま晝日は照る



きんぽうげ、むらく／＼黄なり。風のむた その花ゆらぐ。いろひ かげろひ  
草かげに、九品佛クホシボトケはいましつれ。現ウツしくゆれて、きんぽうげの花

麥畑

かゞやかに 穂竝みゆすれて、吹きとほる 麥原ムキワの底の風はほとれり  
麥の原の穂だち はるけくおしなみに、照り白む日は 光りしづめり  
黒土の畝に、穂立ちのひたさ青アヲに 端正イックしきかも。麥秀ガき竝ぶ  
麥の花 ひそかなれども、目につきて咲きぬる暮れを 風のさびしさ  
山岸に 穂麥のあかり照りかへり、あらはなるかも。赤松の幹

夕畑や 黒穂の立ちの まざぐと をちこち見えて さびし。入る日の  
夕かげる麥原中道フち窪に、踏み處ドをぐらく 日は洩り來る  
草のうへに 踏みためがたきわが歩み。はだしになれど、いたもすべなし  
晝ぎらふ麥原めぐりて來たる音 車かたりと、土橋にかゝる

午後二時

わが山に戻り來にけり。くりやべに、晝を鳴けるは、こほろぎならむ  
ゆくりなく 目につきにけり。薔薇シチの後、庭木のうれの みな緑なる  
わが庭のやつでの廣葉 ゆすりたち、さやかに こゝを風の過ぎゆく



うすぐらき 場すゑのよせの下座の唄。聴けば苦しゑ。その聲よきに

白じろと更けぬる よせの壘のうへ。悄然ボツサリときてすわりぬ。われは

衢風チマタカゼ砂吹き入れて、はなしかの高座のまたゝき さびしくありけり

誰一人 客はわらはぬはなしかの工タクミ さびしさ。われも笑はず

高座にあがるすなはち 處女ふたり 扇ひらきぬ。大きなる扇を

新内の語りのとぎれ おどろけば、座頭紫朝シテウは 目をあかずをり

「富久トミキウ」のはなしなかばに 立ちくるは、笑ふに堪へむ心にあらず

臥\*たる胸しづまりゆけば、天さかるひなの薩摩し さやに見え來も

告げやらば 若き心に歎かめど、汝ナが思ひ得むわびしさならず

しごとより疲れ歸りて、うつゝなく我は寢スれども、明日さめにけり

朝鮮の教師に ゆけと漣シめ來る あぢきなきふみに、うごく わが心

まのあたり ま日薄れ來る牕がらす 今はほのめくわが手の動き

捲きたばこ 藁灰ふかくさしたれば、夕づく部屋に、いぶりでつも



新橋停車場

金澤先生の、東京を去られた時

こがらしの風ぎにし後のあかるさや　ゆきとゞまらず。あすふあるとの道  
いさゝめの町のあるきに、竝み來つゝ、相知らなくも、さびしかりけり  
芝口の車馬のとよみの、晝たけて　け近く聞ゆ。この足もとに  
高架線のぷらつとほうむ　長ながと、今日も沍えつゝ、昏るゝなりけり  
汽車のまど　そこにさびしく　さし對ひ　めをといませて　汽車遠ざかる

大正五年　―二十五首―

火口原

しんとして　聲あるものか。わが脚は、明星个嶽の草に觸り行く  
靡き伏す羊齒はをれつゝ、重れる葉裏　目いたし。霜じめる色  
日だまりの山ふところに居たりけり。四方の梢のこがらし　聞ゆ  
峰ごしに　鳴く鳥居つゝ、時久し。山ふところに、日はあたり居り  
足柄の金時山に　入り居りと　誰知らましや。この草のなか



峰遠く 鳴きつゝわたる鳥の聲。なぞへを登る影は、我がなり

這ひ松の這ひの上りや。はるくくに 目をまかせつゝ、山腹ヤマハラに居り

をちここに 棚田いとなみ、足柄の山の斜面に、人うごく見ゆ

向つ峰ツツの樨フキの梢の 霧ごもり、今はしづまる。夕空のもと

ころぶせば 膚にさはらぬ風ありて、まのあたりなる草の穂は揺る

日の後ノチのうすあかるみに、山の湯へ 手拭さげて、人來たるなり

森の二時間

森ふかく 入り坐マてさびし。汽笛鳴る湊の村に さかれる心

この森の一方に はなしごゑすなり。しばらく聽けば、女夫メヲト 草刈る

この森のなかに 誰やら寝て居ると、はなし聲して、四五人とほる

此は 一人 童兒コ坐マにけり。ゆくりなく 森のうま睡イゆ さめしわが目に

まのあたり 幹疎モトアラ木々の幹あまた 夕日久しくさして居にけり

檜ヒノの木ノの乏しき葉むら かさくくと 落ちず久しみ、たそがれにつゝ

初七日

今西甚三部のために

この家の伊豫簾スのなかに、汗かきて 酒のみをらむ心にあらず



わが前に、ふたり立ち舞ふ　をみな子の手ぶり見まもり、いぶかしくあり  
今日の日の　すべなきかもよ。おもしろき手ぶりを見れば、心哭かれぬ  
初七日のほとけを持てり。この酒に、今し　くるしく　酔ひてあるべしや  
夕かげに　呆れつゝ居れば、蝸も　今は聲絶え　しづまりにけり  
生き死にの悠なるものか。うつそみの人のわかれに、目をとぢにつゝ、

いろは館

夏かげの　この居間に客來るなり。四方のもの音　しづまるま晝

ま日深くこもれる家に　待ち久し。蚊は鳴き寄り來。ほのに　ま遠に

大正四年以前、明治四十四年迄　一八十七首

おほとしの日

除夜の鐘つきをさめたり。静かなる世間にひとり　我が怒る聲

大正の五年の朝となり行けど、膝もくづさず　子らをのゝしる

墓石の根府川石に水そゝぐ。師走の日かげ　たけにけるかも

どこの子のあぐらむ風ぞ。大みそか　むなしき空の　たゞ中に鳴る

机一つ　本箱ひとつ　わが憑む　これの世のくまと、目つぶりて寝る



牛の乳のチにほひつきたる著る物を、胸毛あらはに 坐チし人あはれ  
あぢきなき死にをせしかと、片ちひのうなゐを哭きし その父もなし  
裏だなを 背戸ゆ見とほし 夏の日の照りしづまりに けどほき墓原  
あわたゞしく 世はありければ、たま〜も 忘れむとする墓をとぶらふ

菟道

わが腹の、白くまどかにたわめるも、思ひすつべき若さにあらず  
如月の雪の かそけきわがはぎや。白き光りに 目をこらしつゝ、

順禮は鉦うちすぎぬ。さびしかる世すぎも、ものによるところある

なむあみだ すゝろにいひてさしぐみぬ。見まはす木立ち もの音もなき  
ざぶ〜と、をり〜水は岸をうつ。ひとりさびしく 麥踏みてゐむ

白じろと たゞむき出し畝をうつ 畠の男 あち向きて 久し

日の光り そびらにあびて寒く行く百姓をとこ。ものがたりせむ

錢

たなごこに 燦然としてうづたかき。これ わが金と あからめもせず  
道を行くかひなたゆさも こゝろよし。このわが金の もちちもりはも



目ふたげば、くわうくとして照り来る。紫摩黄金シマワウゴンの金貨の光り  
たなそこのにほひは、人に告げざらむ。金貨も 汗をかきにけるかな

海軍中尉三矢五郎氏を悼む

わたつみの海にいでたる富津フツの崎 日ねもす まほに霞むしづけさ  
そのむくろト覓むと わがいはゞ、わたなかの八尋さひもち こたへなむかも  
うろくづのうきぬる浪になづさひて ありとし君を 人のいはずやも

家びとの消息来て

家のため博士になれと いひおこす親ある身こそ さびしかりけれ

我孫子

道のうへ 小高き岡に男ゐて、なにかもの言ふ。雲ふるゆふべ  
野は 晝のさえしづまりに、雑木山 あらにはに 赤き肌見せてゐる  
藪原のくらしきに入りて、おのづから、まなこさやかに 睜メヲトきにけり  
心 ふと ものにたゆたひ、耳こらす。椿ツバキの下の暗き水おと  
雲ふる雑木のなかに、鍬うてる いとゞ 女夫メヲトの唄の かそけき

太秦寺

常磐木のみどりたゆたに、わたつみの太秦寺ウツマサテラの晝の しづけさ



二人あることもおぼえず。しんとして いさごのうへに 鵝一羽ゐる

おそろしき しごまなりきな。梢より、はたと 一葉は おちてけるかな

ほれぐと人にむかへば、晝遠し。寺井のくるま 草ふかく鳴る

まさびしくこもらふ命 草ふかき鐘の音しづみ、行きふりにけり

鹽原

馬おひて 那須野の闇にあひし子よ。かの子は、家に還らずあらむ

わがねむる部屋をかこめる 高山の霜をおもひて、燈を消しにけり

神のごと 山は晴れたり。夜もすがら おもひたはれし心ながらに

にはとりの踏みちらしたる芋の莖 泣きつゝとるか。山の處女ら

朝日照る山のさびしさ。向つ峰ツに斧うつをとこ。こちむきてゐよ

かくしつゝ、いつまでくだち行く身ぞや。那須野のうねり 遠薄トホス、キあり

生徒一

夜目しろく 萩が花散る道ふめば、かの子は 母の喪にゆきにけり

二

白玉をあやぶみ擁き 寝ざめして、春の朝けに、目うるめる子ら

このねぬる朝けの風のこゝちよき。寝おきの 顔の ほのあかみたる



こゝちよき春のねざめのなつかしさ。片時をしみ、子らが遊べる

砂原に砂あび 腰をうづめぬつ。たはぶれの手を ふと 止めぬ。子ら

わが子らは 遊びほけたる目を過る何かちふとて、おほゞれてをり

わが雲雀 今日はおどけず。しかすがに つゝましやかにふるまひにけり

くづれふす若きけものを なよ草の牀に見いでゝ、かなしみにけり

倦みつかれ わかきけものゝ寝むさぼる さまはわりなし。かすかにいびく

やせくゝて、若きけものゝ わが前にほと息づきぬ。かなしからずや

すくくゝと のびとゝのほりゆく子らに、しづごゝろなき わがさかりかも

三

二三尺 藜のびたるくさむらの 秋をよろこびなく蟲のあり

沓とれば、すあしにふるゝ砂原の しめりうれしみ、草ぬきてをり

わが病ひ やゝこゝろよし。なにごとかしたやすからず やめる子のある

四

小鳥 小鳥 あたふた起ちぬ。かたらひのはてがたさびし。向日葵の照る

はるしゃ菊 心まどひにゆらぐらし。瞳かゞやく少年のむれ

かの子こそ われには似つゝものはいへ。十年の悔いにしづむ目に來て



人の師となりて ふた月。やう／＼に あらたまりゆく心 はかなし  
わかやかに こゝちはなやぎあるものを。さびしくなりぬ。子らを教へて  
おろ／＼に 涙ごゑして來つる子よ。さはなわびそね。われもさびしき  
いくたびか うたむとあぐる鞭のした、おぢかしこまる子を泣きにけり

阿蘇をこえて

よすがなき心 あやぶくゆられぬつ。馬車たそがれて、町をはなれつ  
つまづきの この石にしもあひけるよ。遠のぼり來て、阿蘇のたむけに  
盆すぎて をどりつかふる里のあり。阿蘇の山家に、われもをどらむ

奥熊野

たびごゝろもろくなり來ぬ。志摩のはて 安乗<sup>アノリ</sup>の崎に、燈<sup>ヒ</sup>の明り見ゆ  
わたつみの豊はた雲と あはれなる浮き寢の書の夢と たゆたふ  
闇に 聲してあはれなり。志摩の海 相差<sup>アササ</sup>の迫門<sup>セト</sup>に、盆の貝吹く  
天づたふ日の昏れゆけば、わたの原 蒼茫として 深き風ふく  
名をしらぬ古き港へ はしけしていにけむ人の 思ほゆるかも  
山めぐり 二日人見ず あるくまの蟻の孔に、ひた見入りつゝ、  
二木<sup>ニキ</sup>の海 迫門<sup>セト</sup>のふなのり わたつみの入り日の濤に、涙おとさむ



青山に、夕日片照るさびしさや 入り江の町のまざくくと見ゆ

あかときを 散るがひそけき色なりし。志摩の横野の 空色の花

奥牟婁の町の市日の人ごゑや 日は照りぬつゝ 雨みだれ來たる

藪原に、むくげの花の咲きたるが よそ目さびしき 夕ぐれを行く

大海にたゞにむかへる 志摩の崎 波切の村にあひし子らはも

ちぎりあれや 山路のを草莢さきて、種とばすときに 來あふものかも

旅ごゝろ ものなつかしも。夜まつりをつかふる浦の 人出にまじる

にはかにも この日は昏れぬ。高山の崖路 風吹き、鶯のなく

那智に來ぬ。竹柏 樟の古き夢 そよ ひるがへし、風とよみ吹く

青うみにまかゞやく日や。とほくし 妣が國べゆ 舟かへるらし

波ゆたにあそべり。牟婁の磯にゐて、たゆたふ命 しばし息づく

わが乗るや天の鳥船 海ざかの空拍つ浪に、高くあがれり

たま〜に見えてさびしも。かぐろなる田曾の迫門より 遠きいさり火

わたつみのゆふべの波のもてあそぶ 島の荒磯を漕ぐが さびしさ

わが帆なる。熊野の山の朝風に まざり おしきり、高瀬をのぼる

うす闇にいます佛の目の光 ふと わが目逢ひ、やすくぬかづく



明治四十三年以前、三十七年頃まで 一七十五首

焚きあまし その一

竹の葉に 如月の雪ふりおぼれ、明くる光りに心いためり「京、西山」二首

大空のもとにかすみて、あか／＼と くれゆく山にむかふ さびしさ

木の葉散るなかにつくりぬ。わが夜牀ヨドコ。うづみはてねと、目をとちて居り

かれあしに 心しばらくあつまりぬ。みぎはにゐつゝ、ものをおもへば

ちまたびと ことばかはして行くにさへ 心ゆらぎは すべなきものを

「所在なく暮した頃」五首

夕波の 佃の島の方とへど、こたへぬ人ぞ、充ち行きにける

さびしげに 經木真田の帽子著て、夕河岸たどる人よ もの言はむ

兩國の橋ゆくむれに、われに似て、後姿ウシロさびしき人のまじれり

町をゆく心安さもさびしかり。家なる人のうれひに さかる

春の日のかすめる時に、つかれたる目をやしなふと、若草をふむ

戸を出で、百歩に青き山を見る。日ねもす おもひつかれたる目に

庭のくま ひそやかに鳴く蟲あるも、今あぢはへる悔いにしたしき

ひそやかにぬればさびしも。たそがれの窓の夕かげ 月あるに似たり



青やまの草葉のしたに、ながりし心のすゑも みだれずあらむ

「宮崎信三、死んだにきまつた後」

あはれなる後見ゆるかも。朝宮に、祇園をろがむ匂へる處女

「母のつきそひに、京都大學病院にゐた頃」六首

ひやゝけき朝の露原 あしにふみ、なにか えがたきしたごゝろやむ

京のやま。まどかにはるゝ見わたしに、なにぞ、涙のやまずながるゝ

秋の空 神樂个丘の松原の、け近く晴るゝ見つゝさびしき

この道や 蹴上の道。近江へと いやとほくし。あひがたきかも

しづかなる晝の光りや。清水の地主の花散る徑を 來にけり

大空の鳥も あぐみて落ち來たる。廣野にをるが、寂しくなりぬ

中學の廊のかはらのふみごゝち むかしに似つゝ ものゝすべなさ 「卒業後五年」

雪ふりて昏るゝ光りの 遠じろに、小竹の祝部のはかどころ見ゆ 「紀伊國日高」

焚きあまし その二

わがともがら 命にかへし戀ながら、年來り行けば、なべてかなしも

いくさ君 武田がのちに、はかなさよ。わび歌多し。あはれ わが友 「祐吉に」一首

君にわかれ ひとりとなりて入りたてば、冬木がもとに、涙わしりぬ

はつくさに 雪ちりかゝる錦部の 山の入り日に、人ふりかへる

牟婁の温泉の とこなめらなる岩牀に、枕す。しばし 人をわすれむ 「紀州鉛山温泉」



月にむき、ながき心は見もはてず わかれし人のおとろへをおもふ

木がらしの吹く日來まさず。わがよどの冬木がうれの 心うく鳴る

そのかみの 心なき子も、世を経つゝ、涙もよほすことを告げ來る

ひたすらに、荒山みちは越えて來つ。清きなぎさに、身さへ死ぬべし 「紀州由良浦」

十年へつ。なほよろしくは見えながら、かの心ひくことのはのなき

このわかれ いく世かけてはおぼつか。身さへ頼まぬ はかなさにして

「出羽に歸り住む友に」

あはむ日のなしとおもはず。ふみわたる茅生の ほどろに 心たゆたふ

秋の山 なく鳥もなし。わが道は、朝けの雲に末べこもれり

石川や 二里も 三里も、若草の堤ぬらして、雨はれにけり

はた／＼と翼うち過ぐ。あはと見る まなぢはるかに きその鳥行く

冬ぐさの堤日あたり 遠く行く旅のしばしを 人とやすらふ

萩が花はつかに白し。ひとりゐる 山のみ寺のたそがれの庭 「西山の善養寺」

山の石 とゞろ／＼と落ち來る。これを前に見、酒をたのしむ 「人に役せられて」二首

旅にゐて、さむき夜牀のくらがりに、うしろめたしも。いねしづむ胸

山のひだ さやかに見えて、大空に、昏れゆく菟道ウヂの春をさびしむ

ともしびの見ゆるをちこち 山くれて、宇治の瀬の音は 高まりにけり



木ぶかく蝸なきて、長岡のたそがれゆけば、親ぞこひしき

春雨の古貂フルキのころも ぬれとほり、あひにし人の、しぬにおもほゆ

杉むらを とをゝに雪のふりうづむ ふるさと來れど、おもひ出もなし

明日香風 きのふや千年。やぶ原も 青菅山アラスガヤマもひるがへし吹く「高市郡」三首

なつかしき故家フルヘの里の 飛鳥には、千鳥なくらむ このゆふべかも

山原ヲフの麻生ナツフの夏麻を ひくなべに、けさの朝月 秋とさえたり

あるひまよ。心ふとしもなごみ來ぬ。頬をたゞよはす 涙のなかに

天つ日の照れる岡びに ひとりゐて、ものをしもへば、涙ぐましも

冬がれのうるし木立ちのひまゝに 積み藁つゞく 國分寺のさと

遠ながき伏し越えみちや。うらゝくに 照れる春日を、こしなづむかも 「伏越峠」地名

庭モの面モにかり乾す藁の 香もほのに、西日ニシヒのひかり あたゝかくさす

目をわたる白帆見る間に、ふと さびし。やをら 見かへり、目のあひにけり

をりゝは かなしく心かたよるを、なけばゆたけし。天ぞ來むかふ

見ミのさびし。そともの雪の朝かげの ほのあかるみに、人のかよへる

ねたる胸 いともやすけし。日ねもすにむかひし山は、わきにそゝれど

わがさかり おとろへぬらし。月よみの夜ぞらを見れば、涙おち來も



わが戀をちかふにたてし 天つ日の、まのあたりにし おとろふる 見よ

いにしへびと あるは來逢はむ。神南備カムナベの萩ヒギちる風に、山下ゆけば「飛鳥トビの村」

むさし野は ゆき行く道のはてもなし。かへれと言へど、遠く來にけり

「親の心にそはないで、國學院にはひつた年の秋」二首

夕づく日 雁のゆくへをゆびざして、いなれぬ國を また言ふか。君

わが、づく朽葉クハごろもの袖 たわに、ゆたかに 春の雪ながれ來ぬ

いふことのすこし残ると 立ち戻り、寂しく笑みて、いにし人はも

こちよれば、こちにとをより なづさナヅサひ來キ、ほのヒトガに人香の。身をつゝむ間

車クルマきぬ。すぐる日我により來にし。今あぢきなくわが、どをゆく

おもふことしばゝたがひ、おきどころなき身暫らく 君にひたさる

夕山路チ こよひまる寝むわがふしどの うさ思はする 鶯ウのこゑ

この里のをとめらねり來ク。みなづきの 夕かげ草の ほのゝとして

おもひでの家は つぎゝ亡びゆく。長谷の寺のみ さやは なげかむ「大和初瀬寺大和初瀬寺炎上」

牧ウシに追ふ馬のかずゝ 何ならぬ 目うるみたりし後ノチも忘れず

ほうとつく息のしたより、槌とりて うてば火の散る 馬ウマの蹄鐵カチゲツ

明治卅七年、中學の卒業試験に落第して、その秋

秋たけぬ。荒涼スミロサムさを 戸によれば、枯れ野におつる 鶺鴒ヒツのひとむれ  
「大和傍丘の洪一の家にやどる」



この集のすゑに

鷗外博士の最後の文集は、確か「蛙」と言うた様に思ふ。長い愛著をふりきつて、學問に立ち戻らうと言つた語氣を、その序文に見出して、寂しきには居られなかつた。所謂とんぼう・蝶々を鳥のうちにかぞまへる態度からすれば、私なども、蛙は蛙である。其も、ほんのはかない、枝蛙である。しかも極めて、周圍に順應する事の拙い、蠢きを續けて來た。學者なかまに立ちまじると、文學者肌が、目だつた。文學者の群れにゆくと、あまり著しく、自在を失うた學究臭さが、省みられた。幾たの友だちも、長い携りから手をふりもいで、私及びぬ遠い處にのいてしまつた。先輩の多くは、私の、道草を嗜む事の甚しさを悪んで、めんどろを見てくれなくなつて行つた。そんな中で、久しく私の上に、濫かい「まもり」を續けてゐて下されたのは、故三矢重松先生である。血をおびた大きな先生の眼は、私にとつて、「かしこまり」でもあり、「やすらひ」でもあつた。併し、唯一つ私の上に臨んでゐたその濫い眼も、私を見棄てるに到るほど、私は長く中道に悶えて居た。

さうなる間、私の一作々々を、私の研究を見るにひとしい歡びを以て、どんなに聴き入つて下された事であつたらう。安倍、晴明とうち臥しの巫女との術くらべを中心にした脚本は、王朝文學研究の具體化出來たものとして、過褒を賜つた。水漬ミヅヅキきつゝ敵愾を誦うた「おほやまもり」の死の敘事詩の構想は、國學の窮極地だとなまでの保證を、先生から受けた事であつた。

更に又、茂吉さん、赤彦さん等のひき廻しで、「あらゝぎ」の上に、自由に作物を發表する事の出来る様になつた時、本氣になつて喜んで下されたのは、東京では、先生が第一の人であつたに違ひない。其先生すらも、最後には、私の低回を憐み、私の歌の、その鑑賞に入り難くなつた事を憎んで、やゝ、心を文學に斷つやうに憑められる傾きになつて來られた。かうして、人に悪まれ、飽かれても尙、文學の結界を踏み出す事は、えせなかつた私である。其間に俄かに、一筋の白道が、水火の二河の眞中に、通じて居るのを見た。柳田國男先生の歩まれた道である。私はまつしぐらに其道を驅け出した。けれども、白道を行きつゝも、二河のしづきは、しきりなく私の身にふりかゝつた。



鷗外博士は、「蛙」一部を以て、その兩棲生活のどちめとして、文壇から韜晦した。愚かな枝蛙は、最後の目を見つめるまで、往生ぎはのわるい妄執に、ひきずられて行くことも知れない。

八九歳の頃一首。十一歳一首。ひき續いて作り出したのは、十五位からの事と思ふ。二つ年がさの兄は、當時「少年園」から「文庫」と名を易へたばかりの雑誌を読み耽つて居た。與謝野鐵幹さんが、暫らく歌の選者をして後、服部躬治先生が、替つて歌を選ばれた。此頃になつて漸く、歌に陸しみを感じかけた兄は、一足先きに、ある文學意識を持つた歌を作り出した。兄を凌ぐ事を爲事にして居た弟は、すぐ、その跡をつけた。けれども、僅かな年齢の差も、文學動機の飽和の度に於いて、著しく、一方には強め、一方には弱めた。私は何時も、兄にまかされて居た。子どもながら、自ら鑑賞を晦ます事の出来なかつた寂しさ。でも、競争意識の卑しさを知つた私は、一方ぼつ／＼兄に學んで行く氣にもなれた。

兄の投書にまげてくれた私の一首も、抜かれて居たのを見て、天に昇る様な氣のした事もある。兄が遊學に出て後、創作動機の薄い私は、歌らしい物を作つた覺えもない。そのあくる

年、明治卅五年には、武田祐吉・吉村洪一・淺沼直之助・宮崎信三・岩橋小彌太・西田直二郎と詩社様のものを組んだ。律氣な武田にはたられるのを常の事として、でも、毎週間二三首・五首と作つて居た。其頃のものは、武田が保存して居てくれたが、今度の選集に、一首も採れるのはなかつた。躬治先生の影響をばわるく受けた我執の姿が、どれにもこれにも現れて居た。其上、鐵幹さん風の、發想を拗らすよみぶりまでも、小賢しくうつして居た痕が見出される。新詩社に對する反感は、既に激しく心に動いて居たに拘らず、歌の上には、其印象らしいものが、今日からは紛れなく見えすいて居る。

卒業試験に、劣等生としてふり残された私は、とり集めた寂しさを知つた。感傷にあまえもし、うち贏ちました。焚きあまし「その一」「その二」は、年の順序に並べられなかつた程、製作時の印象の乏しい即興歌が多い。國學院大學に學生として、氣ずゐな生活をして居た間のもものは、殆、實生活を無視し、實感を疎外した歌ばかりである。四十三年に卒業して、翌年秋、大阪府今宮中學校教員となるまでの一年あまりを、家に居て、所在ない日を送つた。その間に、大阪根岸短歌會の集りに加つて、安江不空さん・花田比露思さん・外山家人さん



などから、今まで思ひ及ばなかつた、靜かに、澄んだ境涯のある事を見知らされた。

根岸派の會には、東京をひき拂ふまへ、二度、子規庵での歌會に出て、晩年の左千夫先生も見、若い茂吉・千櫨・純・文明の方々の顔をも、記憶してゐる。

その頃、東西の根岸のよりあひに、いつも、第一に出された當座の題は、「席上即景」であつた。此が非常に、私に影響した。併し、鈍根の上に、我に執し勝ちの私には、其が急には、効果を顯さなかつた。早い話が、子規庵の「當座」に、

杉垣の隣りのへだて 上じろみ、夜目ひやゝけし。月の夜の霜

當時非常に若かつた文明さんが、激賞してくれた。それで、其時の幼稚な感謝と、好意とを、後年まで、同氏にむかうて持ちつゞけた事だ。が、此歌は實感を逸した形ばかりのものである。根岸派の寫生を表面學びながら、實相に迫らないで、軽い詠歎に逃げてゐる。語の綾で美を盛り立てよう、としてゐる。歌に出て居る文法意識は、躬治風であり、修辭法は、前明星末期の姿である。だが、かう言ふ間に、次第に腹の据ゑどころが、段々きまつて行つたのも、事實である。

態度としては、全體に認めて居ない物の、部分の價値に囚はれると言ふ事は、學問・文學を

ふり分けにした蛙の、常に負ふところの罰である。萬葉研究に一生をつかひ果した木村正辭先生の歌が、極めて低調な「おとつ代ぶり」である事を罵りながら、私自身やつぱり、部分的に古今を認め、金葉・詞花を認め、新古今を容れ、玉葉・風雅を許してゐたのである。ひたみち萬葉に進む人々よりは、誘惑や困憊を、多く凌がねばならぬ訣である。私の歌の、年久くして、尙且、此位の「ゆきあし」を示してゐるに過ぎないのは、甘受せねばならぬ應報であつた。

大正三年の春、二年半をしへた生徒たちを卒業させたのを吉祥きつじやうに、私は職を罷めて、東京に來た。教へた生徒十人ばかりと、本郷赤門前の下宿の三階に住んだ。大正四年秋には、歸國せなければならぬほどに窮しんだ。が、とう／＼東京に留りをふせた。小石川金富町のお針屋の二階の六疊に移つて居た金太郎の處に、いつ時と思つてかゝり人となつたのが、三年の間も其まゝで、居なりに居た。十餘人の生徒の中、私の近まはりに残つた者は、高等工業學校に通うた金太郎と、近所にたよつて來て、高等學校入學試験の用意をしてゐた清志と、前年第一高等學校にはひつた雄祐とになつてしまつた。でも、後から後から、私をたよつて



来た生徒たちが、三四人は居たが、皆それ／＼の方角が開けて、あちこちへ散らばった。

自分では、さまでにも思はなかつたが、やつぱり「身は境涯キリに伴れる」ものと見えて、敏感な清志から、私の動作の、以前の「なごやかさ」を失うた事を指摘せられた事も、幾度かあった。不自由を知らずに育つた金太郎も、私と一つ處に住む爲に、共に苦しいめを見る様な事があつた。其でも、黙々と私のあるく道を、専門こそ違へ、ついて来てくれた。五年の夏、清志を、強ひて鹿兒島の造士館に入らせて後は、金太郎一人を、話相手にしてくらしした。

「あらゝぎ」にはひつたのは、この年であつた。赤彦さんが富坂のいろは館に居た都合から、しげ／＼と出入りをした。其間に、「あらゝぎ」の同人の方々から、數へきれない程よい影響をうけた。

けれども、かうした實生活から来るものを、歌に表さうとして、認識の熟せないうちに、表現不足のまゝではふり出す事が多かつた。今見ても、さもし氣のする歌が限りなく出來た。しかも、此集にさう言ふ歌を、すつかり刪つてしまふ事の出來なかつた執著が恥かしい。推敲に迷ふ事があると、赤彦さんの處に馳けつけた。赤彦さんが、「こゝはかう。そこはあ

あ」と言ふ風に、決斷してくれると、安心した。「あらゝぎ」同人の中、殊に赤彦さんのおかげを蒙つて居る事は、とりわけ書いて置かねばならぬ。

他の同人の方々にも、此際長らくの厚誼を謝して、一本づゝを獻じたいと思ふ。

かうして、幸福な歌人としての生活を續けて居るうちに、ゆくりない機縁が、「あらゝぎ」を遠のく方へ私を導いた。さうして再、文學の上では相談相手のない、ひとりぼつちに、還つた。けれども、長い「あらゝぎ」生活の間に、やゝ腰もきまつて來た。これからだ、と言ふ氣がする。しかし考へて見ると、寂しくなる。わたしの文學は畢竟、枝蛙の藝道である。どこまで行きとほす事が出来るか、又かうした歌集も、も一度出す心持ちになる時が来るか、どうか。恥かしながら、私には、さうした「かね言」をする元氣がない。

今度、この集を作るにも、おほよそは、金太郎一人の努力に任せきつて居た。私は唯その中から、出来るだけ多く刪つたゞけである。巖にしがみついて居る蠟貝をひつぺがす様に、して、それでも、若い頃の作物の十の九までは棄てゝしまつた。さうして残つた中にも、なほして出さねば、目のあてられないものが、尙多かつた。併し、あまり時のかけ離れ過ぎたも



のは、今のいきかたから見れば、寧ろ作りかへても、物にはならぬのである。だから、さうした古い部分のものには、出来るだけ目を塞いで、手を入れずに置いた。わりあひに今の心もちにはひつて居る近年の分だけは、自由にしてもよいと言ふ考へから、直して見たものも、可なりにある。

こんなにしてまで、實は、古い頃無反省の口拍子で出来た様な歌を、保存する必要はないのである。純な文藝の動機からしては、勿論意味のない事である。けれども、私一人の歌心の展開を示すのには、少しは役に立つかと思ふ。もとく私如きの歌に、さう言ふ試みをする事々體が、まちがひの様な氣もするのだが、其にも一つの口實が伴うて居た。

眞實私ほど、他人の影響を受けたものは尠からう、と思ふ。

此海月の様な歌心の漂ひまはつた滞のあとを見れば、自ら、所謂新派和歌の變遷の姿が見えるのである。古い處では、躬治先生の口まねがはつきり見えるし、やゝ進んで子規居士のひょうげた側ばかりを學んだ處も残つて居る。

鐵幹さんに對する反感が却つて、其技巧に近づけた様なところも、十分に見える。だから、根岸派の人々の中、此點から見れば、私は蝙蝠の様な形をとつて居る。其次に來たのは、千

櫛さんの若い時代の、しなやかな抒情の境地であつた。赤彦さんの「馬鈴薯の花」時代の歌も、此意味から、ある時期の私の養ひになつた事を覺えて居る。茂吉さんとはあまりに性格が違ひすぎてゐる爲か、其印象は近年にぼつぼつ見えて、以前には、ちつとも出て來ない。「見のかなし……」と言ふ變な歌を「焚きあまし」に容れたのは、此一首、確に、まだ中學生であつた頃の文明さんの墓場の蓬の歌から、來て居る事を示したかつたのである。啄木の影響は、考へて見ると、非常なものであつた。形の上ではさもない様に見えるか知らぬが、私自身の發想法に翻譯して表して居たのである。生活など言ふ側には、目を瞑り勝ちな私が、歌では、可なりさうしたものゝ出てゐるのは、やつぱりそれなのである。同じ生活派でも、善鷹さんのは、あまりな特殊と特殊との對立から、かぶれ様がなかつた様に思ふ。而も、私自身も近年始めた新形式の歌には、同氏の影がさして來た様な氣がしてならぬ。此人と言ひ、勇さんといひ、歌の上に印象の尠いのは、育つた都會の氣持ちに、相容れぬ處がある爲と思ふ。私は、大阪で成人した。其で、かう言ふ、形といひ、心の入れ方と言ひ、ねばり強くあくぬけのせぬものになつたのである。白秋さんの影響も、「雪」「荒蕪」などには、十分見えて居る。



かうして、自身をいためつけて見ると、殆どに、自身があるのだから訣らない。「かうして居るおれは、だれか知ら」とは、なしかがよくする粗忽者の話のさげに似た感じが深くする。其で居てやつぱり、人から見れば、私ひとり違ひ過ぎて居る様に思はれよう。併し其は、おもに「ことば」や「すがた」の上から来るものである。私はもつと本領がありさうな氣がある。やつぱり前に言つた「これから」である。だが、「これから」がいつまでも「これから」でありさうな、心細い氣もする。

私の歌を見ていたゞいて、第一に、かはつた感じのしようと思ふのは、句讀法の上にあるだらう。私の友たちはみな、つまらない努力だ。そんなにして、やつと訣る様な歌なら、技巧が不完全なのと言ふ。けれども此點では、私は、極めて不遜である。私が、歌にきれ目を入れる事は、そんな事の爲ばかりではない。文字に表される文學としては、當然とるべき形式として、皆で試みなければならぬ事を、人々が怠つて居るだけなのである。短冊・色紙にはしり書きするのと、活字にするのとは別である。だらしない昔の優美をそのまゝついで、自身の呼吸や、思想の休止點を示す必要を感じない、のんきな心を持つて居て貰うては困る。

そればかりか、かうした試みを、軽い意味に考へ易いのは、文字表示法に對して、あまり恥しいなげやりではないか。技巧に専念であればあるほど、字面の感じにまで敏感になる。漢字と假名との配合や、字畫の感觸などにまで心を使ふのは、寧ろ誇るべき事である。しかも其よりも、一層内在して居る拍子を示すのに、出来るだけ骨を折る事が、なぜ問題にもならないのであらう。こんな點などでは、全く立ち場を異にして居ながらも、善磨さんのやつて居るろま字書きの歌や、譯詩などの方が、正しい道を目がけてゐるものと思ふ。「わかれば、句讀はいらない」など考へてゐるのは、國語表示法は素より、自己表現の爲に悲しまねばならぬ。

それに又、私の、かうしたじれつたい、めんどろな爲事にいたつく理由が、も一つあるのである。其は、歌の様式の固定を、自由な推移に導く豫期から出てゐる。五七五七七の形を基準にして、書きもし、讀み下しもある爲に、自然の拍子は既に變つて居ても、やはり、句跨りと思ひく、讀んだり、感じたりして居る。これは表示法から来る讀み方の固定なのである。私どもはどうしても、此だけは、我々の時代の協力によつて救ひ出さなければならぬ。歌の生命の爲である。我々の愛執を持つ詩形の、自在なる發生の爲である。



私は、地震直後のすさまじつた心で、町々を行きながら、滑らかな拍子に寄せられない感動を表すものとしての――出来るだけ、歌に近い形を持ちながら、――歌の行きつくべきものを考へた。さうして、四句詩形を以てする發想に考へついた。併し其とても、成心を加へ過ぎて、自在を缺いてゐる。私は、かうして、いろ／＼な休止點を表示してゐる中に、自然に、次の詩形の、短歌から生れて來るのを、易く見出す事が出來相に思つてゐる。私は、今も迷つてゐる。これをはじめから、十年位にはなる。しかも、思想の休止と、調子の休止と、いづれを主にしていよいよか、それさへまだ、徹底しきつては居ない。けれども、一人の努力よりは、多人數の協同作業が、自然にある道筋を開くべきものと信じて、一人でも多くのなかまの出來るのを待つ爲に、功利風に考へる人からは、むだと思はれるはずの爲事をつゞけてゐる。併し此點は、私が自身の歌に「おぼつかなさ」を持つて居る様なものではない。いつかは實現の出來、さうして、古典としての歌から、自在な詩形の生れて來る事が、信ぜられてならないのである。

こんな事に入れるのも、或は枝蛙なるが故のことかも知れない。けれども、蛙なるが故に、思ひ捐てる事の出來ぬ、日本の詩形の運命なのである。

宮廷詩なる大歌系統の詩形が、三十一文字に固定して來た間に、小歌即民謡は、限らない變化と、自在なる展開を経て來たのであつた。ほとんど、民族文學唯一の形式とも思はれて來た短歌が、生活の拍子にそぐはなくなつたのは、單に、近代の事ではない。もう、ほんとうの様式、求心的な發想を持つものが、歌から生れて來てよいはずである。われ／＼の内側の拍子には、遠心的な俳句や、「詩」に任せきれないものが、永久にあると思ふ。皆さん。私の焦慮を察して、この企てに、と申してお氣にめさぬなら、どうか、次の時代の實現の爲に、お力をお貸し下さい。

久邇ノ宮さまにかよふ自動車、しつきりなく家ゆする日

釋 迢 空

(大正十四年五月)



安の  
in



我がまをす

春のことぶれ 聴きたまへ

けふのあしたより後、

この國の文學

いよゝ盛りにおこり、

この國の歌

いよゝ弘くゆきとほらむ。

さるにても、

わが歌のいぶせさ。

かくしつゝ

いとゞさびしく かそかに



ます／＼に、思ひえがたくなり行きて、  
つひに  
花匂ふこの國の  
文運に、あづかることもあらず、とぞ思ふ。

昭和五年春王正月

釋 迢 空

春のことぶれ 目次

序

羽澤の家 (八十八首)	
冬立つ廚 (十一首)	一四四
枇杷の花 (七首)	一四八
卒業する人々に (二首)	一五〇
をとめに誨ふ (十一首)	一五一
となりの音 (九首)	一五五
出勤前 (四首)	一五八
もの忘れ (三首)	一六〇
冬來る庭 (四首)	一六一
羽澤の家 (十九首)	一六三



夜の茶 (二首)……………一六九  
 零時近く (二首)……………一七〇  
 別陽譚話 (五首)……………一七一  
 晝のいこひ (五首)……………一七三  
 家の子 (四首)……………一七五

人ごと (七十三首)

先生 (十四首)……………一七八  
 赤彦の死 (十四首)……………一八三  
 かゝる人あり (三首)……………一八八  
 鶴の人々 (十首)……………一九九  
 夏のわかれ (十一首)……………一九三  
 秋山太郎 (九首)……………一九七  
 わかき人の家 (七首)……………二〇一  
 ある人に (一首)……………二〇四  
 繪をかく夏子へ (四首)……………二〇五

東京詠物集 (五十四首)……………二〇九

門中瑣事 (三十六首)……………二二一

山かげ (四十八首)

石見の道 (三首)……………二四八  
 甲斐信濃 (三首)……………二四九  
 隼人の國 (八首)……………二五〇  
 山道 (十六首)……………二五三  
 伊豫國 (三首)……………二五九  
 上州河原湯 (十首)……………二六一  
 多武峯 (五首)……………二六四

風の音 (三十七首)

古泉千櫨 (七首)……………二六八



青山に向ひて (七首)……………二七〇

風のおと (二首)……………二七三

冬草 (八首)……………二七四

酒嗜む若き人に (一首)……………二七八

七月十七日 (三首)……………二七八

王道 (一首)……………二七九

大嘗會近く (二首)……………二八〇

枝ひゞく (三首)……………二八一

藤野一友 (一首)……………二八二

旅の前夜 (二首)……………二八三

氣多はふりの家 (四十四首)

氣多はふりの家(十九首)……………二八六

灘五郷 (十四首)……………二九三

甲種合格の大學生に (二首)……………二九八

柁樓底歌(四首)……………二九九

一の宮(五首)……………三〇一

大阪詠物集 (三十二首)……………三〇三

雪まつり (四十五首)

山 (七首)……………三〇〇

別所 (四首)……………三〇一

雪まつり (二十六首)……………三〇四

洗馬長興寺 (三首)……………三〇四

樗散留韻 (五首)……………三〇五

昭和職人歌 (三十六首)……………三〇九

春のことぶれ (八首)……………三五五

製作年表……………三六一



羽澤の家



冬立つ廚

くりやべの夜ふけ  
あか／＼ 火をつけて、  
鳥を煮 魚を焼き、  
ひとり 樂しき

はしために、晝はあづくる  
くりやべに、

鍋ことめける  
この夜ふけかも

米とげば、手テひら荒るれ。

今はもよ。

この手を撫で、  
誰かなげかむ

年かへる春のあしたは、  
四十ヨッヂびとぞ

と 思へど、  
我は、たのしまざらめや

物ら喰ひ  
腹のふくれて たふれ寝る  
われをあはれぶ人  
或はあらむ



人の世の嫁が　とりみる寒き飯  
底れる汁に  
飽かむ　我かは

物見れば、  
見る物ごとに、喰はむと思ふ。  
むべ　わが幸も  
喰ふに替へつる

前の世の　我が名は、  
人に　な言ひそよ。  
藤澤寺の餓鬼阿彌は、  
我ぞ

過ぎ行ける　左千夫の大人は、  
牛の腹の臍腑を貪り  
よろこび給ひき

物喰みの  
一期病ひに足らへども、  
かそけく  
心　うごくことあり

胃ぶくろに満たば、  
嘔りて　また喰はむ。  
あき足らふ時の  
あまり　すべなさ



枇杷の花

住みつきて、

この家かげに、あたる日の  
寒きにほひを

なつかしみけり

この庭や、

冬木むら立つ土 さむし。

朝の曇りに、

鳥のありゐる

家びとに、

心すなほに もの言ひて、  
かりそめ心

うちなごみ居り

たゞ ひと木

花ある梢しほの しづけさよ。

煤けてたもつ

枇杷の葉の減へり

風出で、

やがて 暮れなむ日のかげりに、  
花めきてあり。

枇杷の花むら



さ夜ふけ と 夜はふけにけり。  
起きてゐて、

いそしめる子の  
二階の身じろき

さ夜なかに、

茶をいれて居るしづ心。

寝よと思ふに

起きゐる子かも

卒業する人々に

道なかに

人かへりみず たちつくす

道祖神と われと

さびしと言はむ

櫻の花ちりくゝにしも

わかれ行く 遠きひとり

と 君もなりなむ

をとめに誨ふ

ひたすらに

心さびしくなり來なむ 時

と わが思ふ。

足らへるこゝろに



阪のうへに、  
白くかゞやく 町の屋ね。  
ひたぶるに  
われ  
人を憎まむ

ゆくりなく  
電車どほりに 出たりけり。  
われは あゆまむ。  
おもて ひたあげて

ふろしきに持ちおもり来る  
根葱ネギのたば 肉の包みも、  
あしからなくに

今日の日も、  
ゆふげ あさげの味ひに、かゝづらひつゝ、  
うら安きかも

ふところに残り少き小錢コゼニなり。  
あれを買ひ  
これを買ひ、  
喜びにけり

はしためをとりて 往イにたる門弟子モンデシも、  
あやまりて来よ。  
のどけき 此ごろ

わが家の



飯炊ぎ女をつれ行ける

かの 弟子の子も、

さびしくて居らむ

人みなのおとみに馴れて 住むわれを。

をとめはしたも、

そむき行きけり

をとめ居て、

起ち居 寝し居間を見たりけり。

あはれに結へる 残り荷の紐

密ミツカびとの

むつび けがれし屋ぬちぞ

と 憎み言ひつゝ

さびしきものを

となりの音

うつり來しひそかごゝろは、

もりがたし。

隣りの家にあらがふ

聞けば

はらだちて

めをと のゝしる聲聞けば、

我がいきのをの思ひ  
くるしも



生きの身の  
しゝむら痛くひゞき來る  
人うつ人の たなそこの  
音

さしなみの隣りの刀自の いき膚は、  
ひきはたかれて、  
響きけるかも

ひたすらに  
なげうつものゝ 音響き、  
隣りしづかに  
なりて居にけり

あまりにも

隣りしづかに なりにけり。

疊のうへを

わが 見つめをり

怒り倦み

泣きつかれつゝ 寝たりけむ。

隣りのめをと

明日は、さびしも

あらし心なごみに  
眠るらし、隣りびとをや  
さびしみて居む



くりやに 水音高く落したり。  
隣りびとらよ。  
さめろ と 思ひて

出勤前

この日ごろ

心もはらになりけり。

とる箸の色も

目にしみておぼゆ

白飯シライヒの湯氣立つ

朝の暗けくに、

箸をとりつゝ

あはれ と 言ふも

家の子よ。

今日のゆふげは 早く来よ。

きそも をとゝひも

飯イ冷えて居し

わが家や

朝の飯にも、

なまぐさき そへくさは

缺かれざりけり



もの忘れ

をとめらと

ことごとひ羞づること しらず、

若き三十<sup>ミチ</sup>は

ありにけるかも

いとけなく

我とあそびしをみな子を

あはれ と 思ふ時は

來にけり

あるき來て、

道にたゝずみ

思ふことあり。

おほきもの忘れを

しける我かも

冬來る庭

山茶花のはな散りすぎて、

庭のうへに

あたる日の色

濃くなりけり

朝々に來ること遅るゝ くりやめの  
若き怠りは、



あはれと思ふ

萩は枯れ

つぎて、芙蓉も落ちむ

とる思ふ

庭土のうへを

掃かせけるかも

庭に掃く 木々の葉音の、

つばらかに

今日は、

心のかなひゆくかな

### 羽澤の家

さびしさは、

大きむすめを しなせつることを

言ひ出<sup>デ</sup>ずなりし 姉かも

大きなる袋を 二つ

積みてかさね、

遠來しことを

姉は言ひ居り

その面<sup>オモ</sup>の  
青きつやめきを 思ひ居り。



國びとのうへを  
姉に 聴きつゝ

家びとの起ち居とよもす家 はなれ  
來し さびしさの  
姉と思はむ

弟の家より 家に  
うつり來しこゝろは、  
病みて  
のどかなるべし

家のうち  
晝さへ暗し。

寝むさぼる姉のいびきに  
怒らじとする

讀み書きの  
人に劣れる小きをひを、  
わが前によびて、  
すわらせにけり

姉の子の二郎をの子よ。  
睦まじみの 心たもちて、  
肩うたせ居り

顔色をよく見とる子 と悪めども、  
叱りがたしも。



あはれに思ひて

子らの上に、

思ひかゝはらず

田舎の家を 姉は言ひ居り。

その古家を

亡き娘にかゝる話を

われはする。

うつら病む姉は おどろかねども

この日頃。

をとめの如く

ほがらかに

もの言ふ姉を 安しと思はむ

二郎子を 叱るは

母の心にあらず。

語はなやぎ

姉は あらそふ

のどかなるうつけ心を

よしと思はむ。

うつら病む日を見るは

さびしも

わが姉の

心しまりに物縫ひて、



ゆふべの窓に、  
今日は 居にけり

うつら病む姉を

ふたゝび家に送り、

おちつく心

した恥ぢて居り

留守まもる

をひのすさびを 叱らむとして、

うつけ心の姉に 悔いたり

日のうちに、

幾たび 我のあくぶらむ。

日ごろの姉の 癖うつりけむ

はらからは はらからゆゑに、  
似もしなむ。

おのもくゝに

思ひ さびしさ

### 夜の茶

しばぐも

あくびの起る 今宵かも。

い寝むとしつゝ

雨のおと聞ゆ



さ夜ふかく茶を 呑み飽けば

い寝むと思ふ

汗をぬぐひて、床のうへに居り

零時近く

寝欲<sup>ホ</sup>しさを くらへて

人にむかひ居り。

をりく おどろく。

われのことば

この夜ふけて、

机のうへにふりたまる

羽蟲とぼしく なりにけるかも

別腸諺語

一

庭士のうへに、

素足の踏みごち。

この こゝろよさも

忘れ居にけり

來しかたは、

來しかたなり。

今はもよ。

よきねくたいの色も このまむ



腹だちて

ほしきまゝにも 言ふわれか。

人とある人を

蟲 鳥にせり

二

まれ稀は

われの煎る茶を 嘗めなめて、

獨り居よさ と ほめ行く人あり

我よりも 若き人

多く なりにけり。

妻得させむ

と つげに来るひと

晝のいこひ

静かなる ひと日なりけり。

日ねもすに

心ねもごろのふみを 書きたり

もの言はむこゝろ頻<sup>シ</sup>發<sup>キ</sup>るを

おちつきて、

誰に書かむと、

紙に向き居り

用もなき



ふみを書く今日の 安らさの  
意<sup>コト</sup>を知らむ人 なきにあらず

山島の麥の葉生<sup>ハ</sup>えを 踏み暮し  
今日も経つとふ

古ぶみ。  
あはれ

のどけさの  
ゆふべ到りて

書き進み、  
告げむと思はぬ ことも書きたり

### 家の子

かどにいる すなはち

我をよびたて、

言ふ子のこゑの、

なにぞ なごめる

わが家のわかき子ゆゑに、

老いびとの

ものねだりする心

たのしさ

疲れつゝかへり來<sup>キ</sup>ぬらむ



いへの子の わかきはだへを  
洗はせにけり

うましもの 食はし  
たらはす 家の子の  
よろこびあさき心を  
まもる

人ごと



先生

亡くなられた三矢重松先生の病氣の、いよ／＼重つた頃、ひとり、箱根堂ヶ島の湯に籠つて、先生を記念するための、ある爲事に苦しんでゐた。

山川ガのたぎちを見れば、  
はる／＼に  
満ちわかれ行く 音の  
かそけさ

山川の満ちあふれ行く  
色見れば、  
命かそけく  
ならむとするも

夕かげに  
色まさり来る山川の  
水のおもてを  
堪へて見にけり  
山川のたぎちに  
向きてなぐさまぬ  
心痛みつゝ  
人を思へり  
岩の間のたゝへの 水の  
かぐるさよ。  
わが大人は



今は 死にたまふらし

風ふけば、みぎはにうごく

花の色

くれなるともし。

ゆふべいたりて

月よみの光りおし照る 山川の水

磧のうへに、

満ちあふれ行く

夕ふかく

瀬音しづまる山峽かたの

水に、

ときたま

おつる木の葉あり

先生、既に危篤

この日ごろ

心よわりて、思ふらし。

讀む書のうへに、

涕おちたり

わが性サガの

人に羞ぢつゝもの言ふを、

この目を見よ

と さとしたまへり



學問のいたり淺きは  
責めたまはず

わがたたくなを　にくみましけり

憎めども、はた　あはれよ

と　のらしけむ

わが大人の命イナヂ

末になりたり

先生の死

死に顔の

あまり　空しくなりいますに、

涙かわきて

ひたぶるにあり

ますらをの命を見よ

と　物くはず、

面わ　かはりて、

死にたまひたり

赤彦の死

山かげの刈り田の藻草、

春さむみ、

白き根つばらに

そなはりにけり

のぼり來て、  
山葬イナヂりどに、



額の汗 ひそかにぬぐひ

わが居たりけり

いちじるく生きにし人か。

風ふきて、

山はふりどは、

ほこり立ちつゝ

かそかなる 生きのなごりを

我は思ふ。

亡き人も、

よくあらそひにけり

山岸の高處めぐれる 道のうへに、

人を悔いやまぬ

我が歩みかも

千櫓も、心はおなじかるべし

わが友のいまはの面に

ひたむかひて、

言ふべきことば

ありけるものを

山里の古家の喪屋に

人こぞり、

おのもくの

言のしたしさ



山里の人の

往き來のむつまじさ。

こゝに臥しつゝ、

ことゝひにけむ

ふかぐくと

柩のなかにおちつける 友のあたまの、

髪の毛のびはも

はろぐに

湖を見おろす丘處の家に、

こゝろぐゝあり。

さゝ波の照り

さゞれ波

つばらに見ゆる 諏訪の湖。

心はつひに、

釋けがたきかも

國學院大學生徒久保田健次君來たる

あらそひの心とけずて

死にゆける 友の子にあふ。

心親しみ

すこやかに いまだありける

亡き友と われと、

かゝる夜 茶を飲みて居し